

言語景観（書き言葉・話し言葉）と 言語計画の関係性：

ケベック州モンレアルの言語使用（フランス語・英語）の分析

吉田悠佑

1-1. 序論

「言語はツールだ」という考えに対し、社会言語学者の中には「言語は社会を反映するものだ」、「言語と社会は相互関係にある」とする者もいる。社会言語学者の一人である Jan Blommaert は著書 “The Sociolinguistics of Globalization” (2010) において、スーパーダイバーシティ状態が言語に与える影響について考察した。スーパーダイバーシティ状態の国や県、市区町村などは多数存在するが、多文化主義を基調とするカナダ連邦はその一つと言える。カナダ連邦が運営するカナダ歴史博物館にある掲示物には “CANADA 3C” というタイトルの下に “TROIS CÔTES” (“COAST TO COAST TO COAST”) という記載があった (図 1)。大石 (2019, p. 79) によれば、これは「3つの海に囲まれた (国家)」という意味であり、先住民の歴史の見直し、並びに配慮が見受けられる表現である。また 2021 年より、先住民迫害への反省を示すために「真実と和解の日」(Journée nationale de la vérité et de la réconciliation, *National Day for Truth and Reconciliation*) が、毎年 9 月 30 日に祝日として制定された。このようにカナダ連邦は多文化主義を政策として重視している。

多文化主義とは異なる間文化主義 (Interculturel, *Interculture*) という考えを持つカナダ連邦の州がある。それは「フランス語憲章」(Charte de la langue française, *Charter of French language*) によって、州公用語がフランス語のみと定められているケベック州である。ケベック州は州旗や “Je me souviens” という州のモットーにも見られるように、フランス文化やフランス語を基調とした独自の文化を築き上げている (吉田, 2019, pp. 81-82)。またフランス語



図1 カナダ歴史博物館の広告 (2018年11月6日に筆者撮影)

を唯一の公用語とする際に「静かな革命」(*Révolution tranquille*, *Quiet Revolution*) が起き、カナダ連邦からの独立を巡った州民投票では僅差でカナダ連邦に留まったという経緯がある。近年では移民や留学生など複合的な要因によりスーパーダイバーシティ状態であり、「妥当なる調整」(*Accommodement raisonnable*, *Reasonable accommodation*) と言われる文化差による衝突を避けるための行動が市民の間では見受けられると Bouchard & Taylor (2008) が報告をしている。

しかし、フランス語の使用に関する強い行動が見受けられることもある。2019年10月4日の *La Presse* 紙によると、バイリンガル挨拶と呼ばれる「Bonjour-Hi」を政府が禁止しようとする動きがあった。また *Montreal Gazette* 紙の2016年6月24日の記事は、Justin Trudeau カナダ連邦首相が州都であるケベック市のスピーチにて英語を使用した直後にブーイングが起こったことを報道している。このように間文化主義や妥当なる調整でも知られているケベック州であるが、フランス語の使用や保護に関しては強い行動に出ることもある。元々、ケベック州におけるフランス語は「フランス語話者は小さなパンの

ために働いている人々」(“Les francophones sont nés pour un petit pain.”)と揶揄されるほど力の弱い言語であり、カナダ国内においても、北米という地域においても、また世界においても経済的、社会的に強い英語を第一言語とする州に囲まれている中で、フランス語を保護し続けるという意識が影響しているからだろう。

特にモンREAL（モントリオール、Montréal）は英語で教授がされている大学があり、英語話者、留学生や移民などによってケベック州の他の市と比較してもより強いスーパーダイバーシティ状態であると考えられる。このような状況下にあるモンREALにおいて、フランス語は実際にどのように使用されているのか、また英語の使用はどの程度見受けられるのかを調査し、モンREALの実生活においてフランス語の力は強いかな否か、またフランス語を保護し続ける方法について検討するのが本稿の目標である。従って、本稿ではモンREALを調査対象地とし、第2章で社会言語学の理論等をまとめた後、第3章と第4章で現地の言語データをまとめ、第5章で分析を試み、上述した研究課題について考察したい。

1-2. フランス語憲章

「フランス語憲章」(Charte de la langue française)として知られるケベック州法 101 号法は 1977 年に制定され、フランス語のみがケベック州の公用語だと明記した公用語法である。この法律は 214 の項目に及び、ケベック州における公的機関や教育現場、民間企業（看板や広告も含む）、公共交通機関に至るまでのフランス語使用を規定している（矢頭, 2009）。また本法律の制定に伴ってケベック州フランス語局（Office québécois de la langue française、以下 OQLF）が設立され、法律の違反者には罰則金を課している。加えて、ケベック州における“Second Cup”というカフェの看板は“Second Cup Café”とフランス語が挿入され、“KFC”(*Kentucky Fired Chicken*)の名称で知られるケンタッキー・フライドチキンの名称も“PFK”(Poulet Frit Kentucky)と呼ばれている。

Razafimandimbimanana (2005, pp. 41-42) は、フランス語憲章を通じて、カナダ連邦憲法上のバイリンガルを否定していると評価した。また矢頭 (2009, p. 23) はフランス語憲章の目的として 2 点あると述べた。1 点目はケベック州において社会的・経済的に低い地位であったフランス語の状況を変えることであり、2 点目はケベック州のフランス語の質を改良し、フランス語話者のケベック・フランス語に対して誇りを持たせるためだと述べた。またフランス語

憲章によって、社員数が50名以上の民間企業は、十分なフランス語化が行われたという証明書である「フランス語化証明書」(certificat de francisation)をケベック州フランス語局から取得することを義務付けられた。矢頭(2009)は、本証明書によって仕事言語としてフランス語が使用される比率が上昇したと報告している。また教育言語において、近藤(2023)はケベック州で出版されたフランス語教科書の語彙を分析した。フランス語審議会やケベック州フランス語局によってケベック州独自の規範が形成され、教科書において非標準的な語彙の使用も見受けられるものの、ケベック・フランス語の多様な語彙が使用されていることを報告した。しかし矢頭(2013, 2022)は、フランス語憲章によってケベック社会におけるフランス語使用が定着したものの、未だ英語の力は強いと述べた。

1-3. ケベコワの定義

「ケベコワ」(les Québécois)という単語は「ケベック人」と訳されることがあるが、その定義は定まっておらず、いくつかの言説がある。荒木(2011, pp. 50-56)ではケベック州の言語法をまとめつつ、その中で発展されてきたケベコワの定義に関する言説をまとめている。荒木(2011, p. 51)によると、ケベック州法101号法(フランス語憲章)の原案である1号法の検討作業がケベック州議会で行われている際、ケベコワを指す対象が論点となったという。ケベック州独自の人権憲章(Charte des droits et libertés de la personne)の制定に伴って設置されたケベック州人権憲章委員会は、「ケベック社会」(société québécoise)を誰もが帰属感を感じられる社会であるべきだと述べた。つまり、「ケベコワ」はフランス語系の固有の集団であり、フランス語が「ケベコワ」の言語と定義することに反対し、フランス語の立ち位置はあくまでケベック社会での共通語であると考えたのである(荒木, pp. 52-23)。これに賛同したのはフランス語系新聞Le Devoir紙の編集長Claude Ryanである。Ryanは「ケベックに住み、ケベックに税金を払う全ての市民が純然たるケベック人である」と定義した(p. 54)。これらの意見に反対したのは、フランス語憲章を定め、カナダ連邦からの独立を問いた州民選挙を行った「ケベック党」(Parti québécois)の設立者であるRené Lévesqueである。彼は著書“Option Québec”の中で「そして、そのパーソナリティーの中心にあるのが、まさにフランス語を話すという事実であり、その他のものはすべてこの本質的要素に付随する。」と述べ、フランス語を話すことこそケベコワだと定義した(p. 55)。これらの議論を踏まえ、最終的に101号法の前文において、「多数派としてフランス語

系である人々の独特の言語であるフランス語は、ケベック人にそのアイデンティティを主張することを可能にする」(“Langue distinctive d’un peuple majoritairement francophone, la langue française permet au peuple québécois d’exprimer son identité”, “WHEREAS the French language, the distinctive language of a people that is in the majority French-speaking, is the instrument by which that people has articulated its identity”) という記述になった。この記述に対し、荒木 (pp. 55-56) は人権憲章委員会の要求を反映させ、ケベコワの中ではフランス語系が多数派ではあるが、フランス語系以外の文化集団が含まれる余地があると評価した。

また Charland (1987) はケベック党による「ケベコワ」という単語使用の効果を考察し、「ケベコワ」という単語自体が「カナダ人」の対になる言葉だと思案した (1987, p. 135)。またケベック州独立派のモットーである “Maitres chez nous” は、“nous” という代名詞をケベック州に入植してきた人々までを含み、その “nous” はケベック人たちを後世にまで残し続ける際に重要な人物だとする効果があると考察した (pp. 138-141)。また元々使用されていた「フランス系カナダ人」(Canadiens français, *French Canadian*) は、北米においてフランス語民族国家の建国を妨げ、適切な「祖国」(*homeland*) のない少数派であることを意味すると考え、「ケベコワ」という言葉がその思想を回避する手段となったと深慮した (p. 142)。

2. 先行研究

2-1. 社会言語学

社会言語学はもともと 19 世紀にヨーロッパ内の地方の方言研究や混合言語とされた言語の研究から始まった。社会と言語の関係性を分析する言語学の分野であり、誰によって、誰に対して、誰が会話上におり、いつ、どこで、どのように、どのような環境下で言語が使用されているかを対象とする言語学である。

2-2. コード・スイッチング

1 つの発話の中で言語が切り替わることをコード・スイッチング (Marques transcodique, *Code Switching*, *Code-Wechsel*) と呼ぶ。借用語と似ているが、元々の言語の音韻が使用されることが大きな違いである。初期の顕著な研究としては Gumperz (1976, p. 1) が挙げられ、コード・スイッチングを以下のよ

うに定義した。

“[...] the juxtaposition of passages of speech belonging to two different grammatical systems or sub-systems, within the same exchange.”

コード・スイッチングはもともと両言語の十分な知識が足りないために発生すると考えられていた (Pedraza, 1978)。これに批判をしたのが Shana Poplack である。Poplack (1979) は、アメリカ合衆国ニューヨークに住むプエル・トリコ人の言語選択を観察し、考察を行った。その結果、言語運用能力の高い話者でもコード・スイッチングを行うと述べ (pp. 72-73)、Poplack (1980, p. 4) にて定義を以下のように述べている。

“Code-switching is the alternation of two languages within a single discourse, sentence, or constituent. [...] Code-switching was categorized according to the degree of integration of items from one language (L_1) to the phonological, morphological and syntactic patterns of the other language (L_2).”

コード・スイッチングは2つの種類があり、文中コード・スイッチング (Intra-sentential code-switching) と文間コード・スイッチング (Inter-sentential code-switching) である。前者は単語単位で言語を切り替えるのに対し、後者は1文ごとに言語を切り替えることを指す。また短い語尾部分や感嘆表現の部分のみで行われるコード・スイッチングは、象徴的コード・スイッチング (Emblematic code-switching) と言われる。Poplack (1980, p. 40) では、文中コード・スイッチングを行うには、少なくとも第二言語における統語論の知識が必要なため、言語運用能力の高い話者は文中コード・スイッチングをより多く行うと述べた。

日本においてもコード・スイッチングの事例研究が行われている。例として田崎 (2007) による日本人学生と留学生のグループディスカッション、吉野・西住 (2015) の二言語併用ゼミにおけるグループワークがあるが、どちらも語彙の不足などの言語運用能力における問題や意思疎通の問題を解決するための手段として、コード・スイッチングが使用されていると述べている。

2-3. コミュニケーション・アコモデーション理論

コミュニケーション・アコモデーション理論 (Théorie de l'accommodation de la communication, *Communication Accommodation Theory*) は、Giles et al. (1991) によるアコモデーション理論が土台となった上で、Giles & Ogay (2010) にて成立された。この理論におけるアコモデーション (Accommodation) とは話者と聞き手の社会的距離を測る指標であり、それを近づける要素としてコンバージェンス (Convergence) がある。コンバージェンスとは

“[...] a strategy whereby individuals adapt their communicative behaviors in terms of a wide range of linguistic (e.g., speech rate, accents), paralinguistic (e.g., pauses, utterance length), and nonverbal features (e.g., smiling, gazing) in such a way as to become more similar to their interlocutor's behavior” (2010, p. 295)

であり、聞き手の話し方に近づけることを指す。聞き手から好意や尊敬が得られ、コード・スイッチングを使用したコンバージェンスによって社会的距離 (*Bereich soziale Entfernung*) を近づけられると Yoshida (2017, pp. 14-15) は結論付けた。

これの対となる考えはダイバージェンス (divergence) であり、“[...] an accentuation of speech and nonverbal differences between self and the other” (2010, p. 295) と定義され、話し手と聞き手の違いを強調する話し方である。一例として、Yoshida (2017, p. 13) の言語データを用いる。

Am Telefon

ich: Bitte korrigiert meine Zusammenfassung auf
Japanisch. Ich bezahle dir deux cents yen oder trois cents yen.
(Zweihundert Yen oder Dreihundert Yen)

0912: … (Schweigen ca. 3 Sekunden) 今のドイツ語？

Danach fragte ich die Person, wie sie sich bei dem Satz fühlt.

0912: „私の知っている言語なら大丈夫だけれど、どこがドイツ語でフラ

ンス語かわからないレベルで混ぜ込んでくるでしょ。だからこいつ何言ってんだと思う。”

本データでは、フランス語を理解しない研究協力者に対してフランス語を使用し、ダイバージェンスを発生させ、その感想を尋ねた。「だからこいつ何言ってんだと思う」という感想は、ダイバージェンスによって話し手と聞き手の違いを強調した結果、嫌悪感が発生したために発せられた感想だと考えられる。これと同様に、ダイバージェンスによって嫌悪感を抱かせた一例として、1978年1月26日の“The Montreal Star”に投稿された Sonia Day による “Please Don’t Switch” を引用する (Heller, 1978, Fraser, 2006 より引用)。

I walk up to the counter, intent on buying some socks. ‘Bonjour,’ says the woman behind the counter, smiling. ‘Est-ce que je peux vous aider?’ ‘oui,’ I smile back. ‘Je voudrais acheter des bas comme ça.’ I point to some socks on display in the showcase. ‘En beige, s’il vous plaît.’ ‘Yes, of course, Madame,’ she responds in English. ‘What size?’ ‘Er...’ I pause, ‘nine and a half, please.’
[...]

Dammit, I want to say. Dammit, lady, why do you always switch to English? ...Does my French sound so terrible that you’d rather not converse in it with me... Do you recognize an anglophone...and presume I’d prefer to use my own language? [...]

コンバージェンスやダイバージェンスと類似した考えとして、聞き手の話し方に限りなく近づけるオーバーコンバージェンス (Over-convergence) や、聞き手が理解しない場合でも話し手の話し方を一切変えないメンテナンス (Maintenance) がある。簡単なテーマや文法選択、とてもゆっくり話す、大袈裟に丁寧話すことは前者に分類される。後者について、後述するオーディエンス・デザインの枠組みを用いて考察した Bell (2001) は、聞き手が理解しない変種を使用することは聞き手を聴衆のグループから外すことを意味すると述べた。

先述の通り、ダイバージェンスは聞き手と話し手の違いを強調するものであり、嫌悪感を聞き手に抱かせることもある。しかしながら Yoshida (2017, p. 11) は、2人の話者がそれぞれ自分の第一言語のみで意思疎通をしているデータを示した。

In Supermarkt in der Nähe von UQAM (französische Universität) und McGill Universität (englische Universität)

Verkäufer(in): Bonjour.

0117: Hi

Verkäufer(in): Avez-vous une carte de point?

(Haben Sie eine Kundenkarte?)

0117: Yup (Die Person zeigt ihre Kundenkarte)

Verkäufer(in): Avez-vous besoin d'un sac en plastique?

(Brauchen Sie eine Plastiktüte?)

0117: Yup, Please.

Verkäufer(in): Voilà, Bonne Journée. (Hier. Schönen Tag noch.) (Die Person gibt die Plastiktüten)

0117: Thanks.

これに対して、Yoshida (2017, pp. 8-9) は下記のように分析した。

Die Provinz Québec ist die einzige, das Französisch als offizielle Sprache hat. Und nach Audience Design spricht man offizieller in den Situationen in Erziehung und Arbeit. Wenn man in einer Arbeitssituation spricht, ist diese Sprachauswahl offizieller und kann weder Divergenz noch „Maintenance“ sein. Die Personen folgen nur der Regel, die offizielle Sprache in Québec zu sprechen.

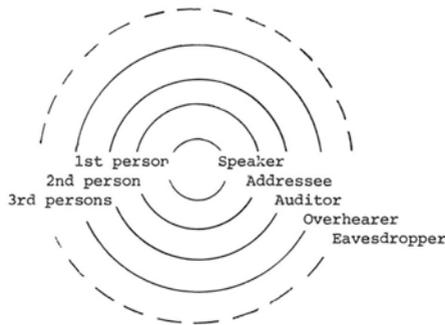
2-4. オーディエンス・デザイン

Allan Bell (1984, 2007) は、話し手と聞き手だけが会話に参加している人物ではなく、周囲にいる人々などの聴衆も加味して考察することが必要だと述べた。聴衆の中には5つのカテゴリーやレベルがあり、まず会話の中心となる参加者は話し手 (Speaker) である。次に話し手が存在を知っていて、会話に参加することを認めており、また話しかけている人物が聞き手 (Addressee) である。また話し手が存在を知っていて、会話に参加することを認めているが話しかけていない場合には傍聴人 (Auditor) として扱われる。話し手が存在を知っているが、会話に参加することも話しかけることもしていない場合には偶然聞く人 (Overhearer) であり、話し手が存在を知らず、会話に参加すること

も話しかけることもしていない場合には、盗み聞く人 (Eavesdropper) と分類されている (訳語は東 [2009] を参考にした)。

	Known	Ratified	Addressed
Addressee	+	+	+
Auditor	+	+	-
Overhearer	+	-	-
Eavesdropper	-	-	-

[出典：Bell (1984, p. 160) より作成]



[Bell (1984, p. 159) より引用]

この理論を用いることによって、話し手の言語選択を分析する際、より詳細に言語選択に影響を与える人物とは誰か、またどのような影響を与えているのかの考察が行えるであろう。例として Yoshida (2017, p. 10) において、フランス語を理解しない人物1名を含めた3人での会話においてフランス語が使用された際に、話し手がその理解しない人物を会話に参加させるために英語に切り替えた事例を紹介した。

Im Restaurant in Montreal

0129: Une collègue m'a dit... (Eine Kollegin hat mir gesagt...)

(Die Person sieht mich)

0129: Oh! I forgot you don't get French! I was talking about...

つまり、フランス語の使用によって聴衆の外に置かれたフランス語を介さない聞き手を、話者が英語に切り替えることによって聴衆の中に入れて解釈でき

る。

1-1. で述べたように、ケベック州では妥当なる調整が見受けられる (Bouchard & Taylor, 2008)。よって、フランス語を第一言語として使用している話者であっても、フランス語を理解しない聞き手を聴衆の一員とするために、英語や他の言語へ切り替えるという妥当なる調整を行う可能性がある。その一例として Yoshida (2017, p. 9) は下記の店員と客の会話を紹介した。

In Snowdon, Montreal, Québec [...]
Verkäufer(in): Bonjour, Hello (Guten Tag)
0629: Bonjour (Guten Tag)
Verkäufer(in): What can I get for you?
0629: One small hot chocolate, please.
Verkäufer(in): Trois dollars...et... (Drei Dollar...und...)
0629: quarante (vierzig) (mit Lächeln)
Verkäufer(in): merci! (Danke!) (mit Lächeln)

またこれに関して Yoshida (2017, p. 10) は以下のように分析をした。

Die Versuchsperson wählt Französisch damit aus, um „Bonjour“ zu sagen. Zuerst unterscheidet sich die Sprache der/die Verkäufer(in) von der Versuchsperson. Aber danach versucht der/die Verkäufer(in) auf Französisch zu sprechen.

Nach der Institutionellen „Accommodation“ ist die Situation Art 1. Ich kann vermuten, dass der/die Verkäufer(in) sich im Bereich Soziale Entfernungen zu nähern und die Sprache der Versuchsperson zu sprechen versucht. Eine weitere Vermutung ist, dass die/der Verkäufer(in) dem anderen Publikum zeigt, Französisch zu sprechen.

2-5. ドメインと店舗における言語選択

Fishman (1965) は第二次世界大戦前のアメリカ合衆国におけるドイツ人移民、Greenfield & Fishman (1970) はニューヨーク市におけるプエル・トリコ人の会話を分析した上で、状況、(話の) テーマ、話者間の関係性によって言語選択が行われると考察し、それらを総括してドメイン (domain) という考

えにまとめた。状況 (situation) とは、例として家ででの会話と教会内での会話が異なることを指す。テーマ (thema) は、そのテーマを学習した言語によって言語選択が変わるという考えである。言語 X で学習したテーマ X を話題にする際には、言語 Y ではなく言語 X が選択されることが一例として挙げられる。関係性 (relationship) は、どの人に対してどの言語を使用するかを意味し、まず家庭内で学習すると考えられている。そしてドイツ人移民は、家族、友人関係、宗教、教育、労働環境、行政の場が、プエル・トリコ人は家族、友人関係、宗教、教育、労働の場がドメインであると考察した。また、話し手が教育、または労働のドメインにいる場合、もしくはそれらを話題としている場合、そのドメインに適切な話し方をすると述べられている。

このドメインの考え方を、Bell (1984) はアコモデーションの考えへ応用し、レストランやカフェ、ホテル等の店舗における店員の話し方は特殊であると述べた。店舗におけるアコモデーションは、短い会話のみで終わる店舗と、長い会話が求められる店舗の2種類がある。ウェ이터など短い会話のみで終わる店舗における会話は、基本的に店員自身が好む話し方、もしくは多くの利用客が好む話し方が使用される。それに対して長い会話が求められる店舗は、店員は顧客の一人一人に合わせた話し方を選ぶ傾向にある。前者の一例として、Yoshida (2017) はモンレアル島の北部にある Laval 市のスーパーマーケットで勤務をしていた人物に話を聞き、その研究協力者は挨拶における言語選択について以下のように述べた (pp. 8-9)。

Montreal is an exception, because there are two English universities. The other areas are mostly francophone. So, I say only "Bonjour" (Guten Tag) in my supermarket. When a customer answers in English, I speak English. When a customer says "Bonjour" (Guten Tag), I speak French and don't use English unless the customer speaks English.

If a customer speaks French and I speak English to the customer, it's rude and some customers get angry and then say to me "Why do you speak English in Québec?"

If a customer doesn't answer my question, I say it again. And then I show a point card or a plastic bag. When a customer doesn't understand it, I give up. Because our supermarket is busy and we have to work fast. So, I can't have a long time to one customer.

またこれに対して Yoshida (2017, pp. 8-9) は下記のように分析した。

Nach der Institutionellen „Accommodation“ (vgl. 5-2-1) folgt die Person der Art 2, d.h. „Maintenance“. Die Sprachauswahl wird von dem Situation Ort (Québec) beeinflusst. Und ich kann vermuten, dass die anderen Kunden (Zuhörer, zufälliger Zuhörer und Lauscher) auch die Spracheauswahl beeinflussen.

2-6. ダイグロシア

多言語が使用される社会を分析するには、ダイグロシア (Diglossia) という考えが有用である。1つの言語における2つ以上の変種が異なる状況下で使用されることから考え出され、H変種とL変種の2つの分類がある。一例としてスイスにおけるドイツ語の状況を Ferguson (1959) は取り上げ、スイスにおいて標準ドイツ語がH変種、スイス・ドイツ語がL変種であると分析した。H変種、L変種間の差異としては機能 (Function)、威信 (Prestige)、文学遺産 (Literary Heritage)、習得 (Acquisition)、標準化 (Standardization)、安定性 (Stability)、文法 (Grammar)、語彙 (Lexicon)、音韻 (Phonology) において違いがあったとした。そのうち、機能として Ferguson (1959, p. 329) は下記のように詳細に分類した。

	H変種	L変種
教会やモスクでの説教	X	
使用人、ウェ이터、労働者、店員に対するの指示		X
私信	X	
議会でのスピーチ、政治演説	X	
大学の講義	X	
家族、友人、同僚との会話		X
ニュース放送	X	
“メロドラマ”のラジオ		X
新聞の社説、記事、写真の説明	X	
政治漫画の表記		X
詩	X	
民族の文学		X

[Ferguson (1959, p. 329) より作成]

ダイグロシアという考えは上述の通り複数言語間で使用されていたものではなく、あくまで1言語内における変種の使用される状況を分析して考案されたものである。これを変種ではなく複数言語（とりわけ2言語）に応用を行なったのがFishman（1967）である。フィッシュマンはダイグロシアとバイリンガル（な社会）をまとめ、ダイグロシアでありバイリンガルでもある(Both diglossia and bilingualism)、バイリンガルであるがダイグロシアではない(Bilingualism without diglossia)、ダイグロシアであるがバイリンガルではない(Diglossia without bilingualism)、ダイグロシアでもバイリンガルでもない(Neither diglossia nor bilingualism)の4つにわけた。

2-7. 言語計画

言語計画 (Aménagement / Planification linguistique, *language planning*, *Sprachplanung*) は、Einar Haugen が1950年代後半に提唱したものであり、言語の保護を目標とする。言語計画は言語政治の同義語として使用されることも多くあるが、植民地に宗主国の言語を強要したことと区別するために「言語計画」が使用されることが多い。Haugen (1983, p. 275) は「地位計画」(Status Planning) と「実体計画」(Corpus Planning) に分類した。

「実体計画」はスペリングなどの書き言葉の整備、新しい用語の作成や文法書、辞書の編纂などがあげられ、言語の標準化を目指すものである。それに対し、「地位計画」は社会に与える言語の役割を変えるものである。Haugen (1983, p. 270) によれば、言語計画には4つのステージがあると述べた。

1. 選択
2. コード化
3. 実行
4. 詳述

1の選択はどの言語、もしくはどの変種を参照するのかを意味する。2のコード化は書き言葉の整備、文法の整理、単語の整理であり、また何を標準とするかを検討する。3の実行では書籍、パンフレット、新聞、教科書などを、1の選択や2のコード化で設定した言語や変種で出版することであり、またとりわけ教育において重視されるステージである。そして4の詳述は“modernisation”とも呼ばれ、科学技術の発展によって新しい単語を作成することを意味する。

これに対してJernudd & Gupta (1971, p. 265) は5つのステップに分けた。

1. 問題と事実確認
2. ゴールの詳述
3. 可能な解決策の作成・コスト計算・合理的な解決策の決定
4. 解決策の実行
5. 解決策の評価（特に予測と実情の比較）

1の問題と事実確認はフィールドワークや国勢調査などのデータを収集、及び分析をすることである。3のコスト計算は、「収益性またはコストー利益分析」(*Rentabilitäts- oder Kosten-Nutzen-Analysen*) があり有名である。例としてポーランド政府は、中等教育においてロシア語教育から英語教育へ移行するための費用を計算する際に、本分析法を使用した。しかし Coulmas (2016, pp. 180-195) は、人の感情などの計算できない要素が本分析法では考慮されていないため、改善点もあると述べている。

2-8. 言語景観

言語景観 (*Paysage linguistique, Linguistic Landscape, Sprachlandschaft*) とは、丹羽 (2018, p. 61) によると「日常的に目に触れる言語による様々な表示」である。Calvet (1994, p. 170) によると、言語景観の調査を行うことで、対象地域における言語の力と、その言語の話者の社会的身分を推測することができる。社会言語学における顕著な言語景観の研究としては、Landry & Bourhis (1997) が挙げられる。本文献において、カナダに住むフランス語話者のエスノリンギスティック・バイタリティ (*Ethnolinguistic Vitality*) の度合いを示す指標を推測する際に、言語景観は有効な手段であると述べられている。また表示に書かれている言語をより多く目にすることによって、表示上で使用されている言語を日常生活でより使用しやすくなると報告されている (Landry & Bourhis, 1997, p. 45)。言語景観の研究は様々な地域で行われ、Tussupbekova & Enders (2016) のカザフスタン、Reh (2004) のウガンダ、Wendel (2018) のイスタンブール、丹羽 (2014 b, 2016, 2018) の日本、アイルランド、マルタ、大石 (2008, 2017) のカナダ・ノヴァスコシア州やカナダ連邦全体での調査が例として挙げられる。

言語景観の調査には量的調査と質的調査の2種類がある。量的調査に関して、Wendel (2018, p. 13) はイスタンブールでの調査を経て “The profusion of such signs posted around the streets of Kumkapi points to an active and changeable

underground market for lodging.”と述べ、またTussupbekova & Enders (2016, p. 20) は“Our investigation of the linguistic landscape of the city of Astana reveals that that aim, the national project ‘Trinity of Languages’, is being completely implemented.”と述べた。つまり、量的調査によって調査対象地の社会的状況（経済や政治など）が可視化できると言える。質的調査において、丹羽（2014 a, p. 200）は「そこに存在する言語景観の背後には緒論で述べたように様々なレベルの意味や意図が込められており、読み手は、意識と無意識の両方にそのメッセージ・パラメッセージ・メタメッセージを受信することになる。」と述べ、また大石（2008, p. 20）は「ノヴァスコシア州ヤーマス・カウンティの事例では、フランス語話者がオーナーと思われる店舗や工場でも英語のみの表記になっており、この地域でフランス語があまり活発に使用されていないことをうかがわせた。そして、それを『フランス語使用を一段低くみる意識』が強く残っていることの反映である」と述べた。つまり質的調査によってメッセージの発信者の言語に対するメッセージやイメージなどを読み取ることができると言える。

Landry & Bourhis (1997, pp. 25-29) は、使用されている言語が情報を提供するために選ばれているのか (Informational)、またはデザインとして選ばれているのか (Functional) を区別して分析することが必要だと述べた。その例として、東京の山手線の駅やその周辺の言語を量的に調べ、分析した Peter Backhaus の研究が挙げられる。東京における外国語の使用はエキゾチックさを表現するデザインとしての言語使用だと報告した上で、表示言語が誰によってどのように決められたのかを調査する必要があるとも述べている (Backhaus, 2008)。

質的調査の分析に関してはReh (2004) と丹羽 (2014 a) に詳しい。Reh (2004, pp. 8-14) は使用されている言語の内容を分析し、表示を4種類に分類した。1つ目は複写タイプ (Duplicating) であり、全く同じテキストが複数言語で書かれているものを指す。これは言語教育を推進する場合、読み手が理解できない言語がある場合、または旅行者向けの表示など読み手のターゲットを絞った際に使用される言語使用である。またこの種類は、言語によるアイデンティティを示すことやすべての言語・文化コミュニティの平等を示すことにもつながる。図2はモンレアルで撮影された表示だが、同じ内容の情報が、上部にフランス語で、下部に英語で示されている。これはカナダ連邦の両公用語を示されており、フランス語を理解できない人でも、英語しか理解できない人でも等しく内容を把握できる。

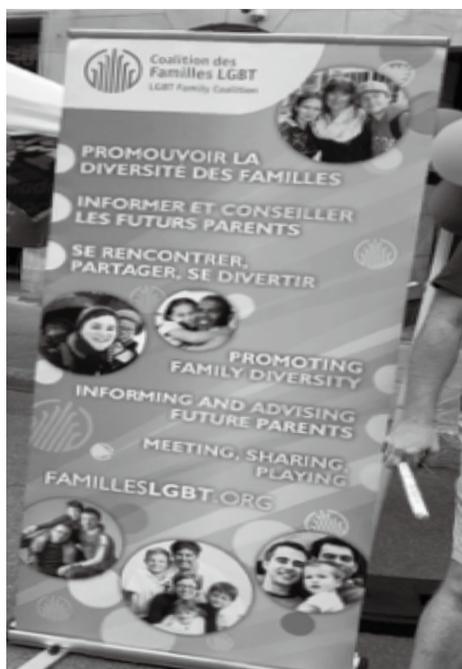


図2 Beaudry 付近の看板
(2019年8月にAngelika Werner氏撮影)

2つ目は断片的タイプ (Fragmentary) であり、完全な情報は一つの言語のみで記載がされているが、いくつかの情報は他の言語でも記載されている場合である。Reh (2004, pp. 10-11) はこのタイプの例として、ウガンダのリラタウンにある銀行の警告表示をあげた。この警告表示には“IMPORTANT NOTICE”と英語で大きな文字で書かれているが、本文は英語とランゴ語で記載されており、英語が不十分である現地客でも本警告表示が読める。モンレアルの事例である図3ではタイトルは英語だが、説明が仏英で記載されているため、本分類に分けられる。

3つ目は重複タイプ (Overlapping) であり、主に1言語のみで書かれているが、1つの情報のみ複数言語で繰り返される表示を指す。しかしながら断片的タイプとは異なり、すべての情報を読解できる多言語話者であることが前提とされているため、繰り返される内容がそのまま翻訳されていない。この分類は単一言語話者にも十分に情報を提供するとともに、重複タイプとは異なって同

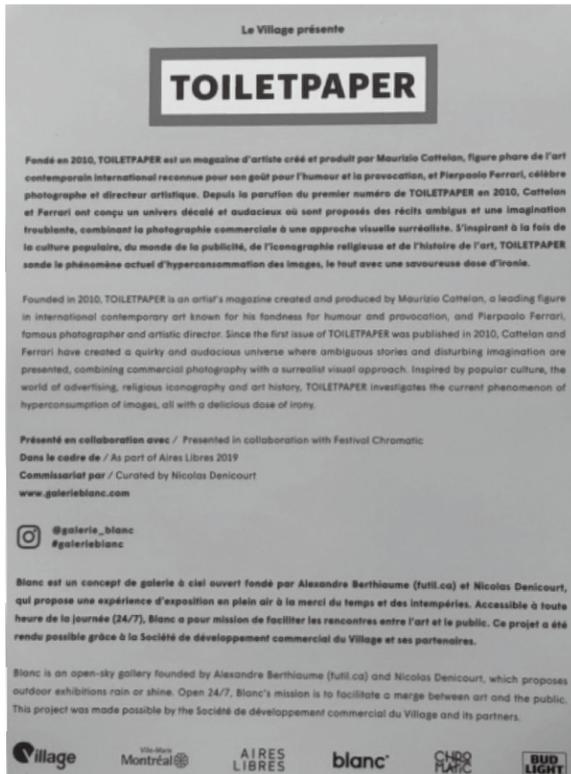


図3 Beaudry 付近の看板 (2019年8月に Angelika Werner 氏撮影)

じ内容の繰り返しをしないため、多言語話者を退屈させない効果がある。また異なる情報がそれぞれの言語で記載されていることで、多言語話者でなければ全ての情報を読み取れず、多言語話者である利点を認識させることができる。図4は日本の関西国際空港で撮影されたものであるが、「先端駅」“Stop 3”と記載されているが、日本語と英語ではそれぞれ別の意味に解釈でき、本タイプに分類できると考えられる。

4つ目は使用されているすべての言語の知識があることを要求される補完的タイプ (Complementary) であり、記載されている情報のいくつかの部分それぞれ異なる言語で記載されている表示である。一例として、図5において「案内所」という意味の記述は5言語全てで記載されているが、「旅行傷害保険」は日本語のみで書かれている。



図4 関西国際空港の案内表示板（2017年12月12日に筆者撮影）



図5 中部国際空港の案内表示板（2016年12月17日に筆者撮影）

丹羽（2014 a, pp. 182-183）は、配置場所、相対的空間配置、相対的大きさ、伝える情報量の差異の有無、伝える情報内容の種類、伝達対象、併記の主体の7つが多言語表記を分析するポイントだと述べている。当該両言語表記そのものの配置場所は「掲出場所が、どの程度目につくように配置されているか」であり、「どのくらい意識を喚起する意図があるか」につながる（p. 182）。両言語の相対的空間配置に関して、上下では上位に書かれた言語が、左右の場合には右に書かれている言語が、より強く意識を喚起させる。両言語文字の相対的大きさにおいても相対的空間配置と同様に、大きく書かれている方が強い。両言語の伝える情報量の差異の有無に関して、丹羽（2014 a, p. 183）は「正確にまったく同じ情報量を与えるかどうかは、その情報の送り手が各言語を同等に重視するかという意識をかなり反映する。」と述べている。つまり、上述したReh（2004）のように分析することで、作成者の言語に対するイメージを解釈できるだろう。両言語の伝える情報内容の種類の分析は「『何について』選択

的に併用表記をするか」、「政策としてどの範囲の何が併用表記として選択されるか」(p. 183)を、両言語の伝達対象の分析は「理解する読み手がどのくらいいるのか、どのくらいを想定しているのか、どれくらいを想定したいのか」(p. 183)を考察できる。また両言語併記の主体は「二言語併用併記によって何かを伝達したい主体は誰であるのか」(p. 183)を分析する。

調査地であるモンREALでも、質的、量的問わずに言語景観の研究が進んでいる。大石(2017)はカナダ連邦とケベック州を比較し、ケベック州にある連邦政府の施設の表記は他州とは異なり、フランス語が上、または右にあることを報告した。またLamarre(2014)はモンREAL内の掲示物や看板の言語を質的に分析し、英語とフランス語の言葉遊びが見受けられると報告した。

またケベック州フランス語局(2000, 2012, 2016, 2018)はモンREAL島を大きく西と東に分け、更に西部・北部・東部・ダウンタウンの4地区に分けて、量的に店名を分析した。その結果モンREAL島全体において22.5%、モンREAL島の西側においてはフランス語憲章に違反した店舗が33%あると述べた。しかしこれはフランス語憲章を基にしたガイドラインに沿っているか否かで分析をし、すでに地区分けした状態で店名の言語を分析している。また、カナダ知的財産局に商標登録がされていれば、店名に英語を使用してもガイドラインには沿っていることとなる。つまり、ケベック州の言語景観は他地域よりも政治の影響を強く受けており、フランス語以外の言語使用が規制されている中で英語を使用することは、何かしらの理由や意義があつての行為だと考えられる。

3. モンREALにおける言語景観

3-1. 大学やその周辺の掲示物の言語表記

フランス語憲章の第88条は大学の教授言語に関して言及しているが、例外として英語系大学は英語で教授できると書かれている。そのような例外の中、各大学はどのような言語使用がなされているのかを調査するため、英語系大学のマギル大学(*McGill University*)とコンコルディア大学(*Concordia University*)、フランス語系大学のモンREAL大学(*Université Montréal*)とケベック大学モンREAL校(*Université du Québec à Montréal*)の構内、及び周辺にある掲示物を調査した。その結果、フランス語系大学においては構内の案内掲示板から喫煙禁止掲示、そして非常時の脱出経路や非常口、消火用ホース、(緊急)電話に至るまで図6のように英語の表示は見受けられず、フランス語

のみであった。

それに対し、英語系大学は英語のみの表示と両言語併記の表示が見受けられ、構内か構外かによって言語使用が異なっていた。英語のみの表示の例として、コンコルディア大学で撮影したレストランの広告（図7）がある。フラン

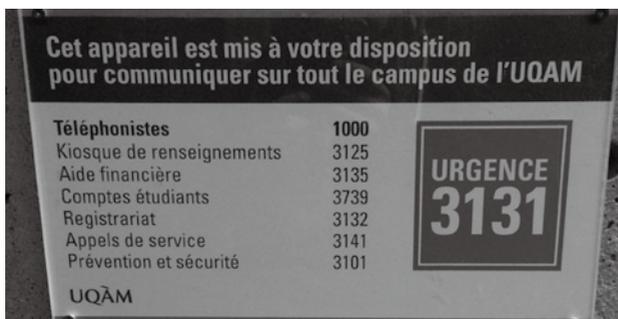


図6 ケベック大学モンレアル校構内にある非常電話。表示の下に電話機がある。（2018年11月7日に筆者撮影）

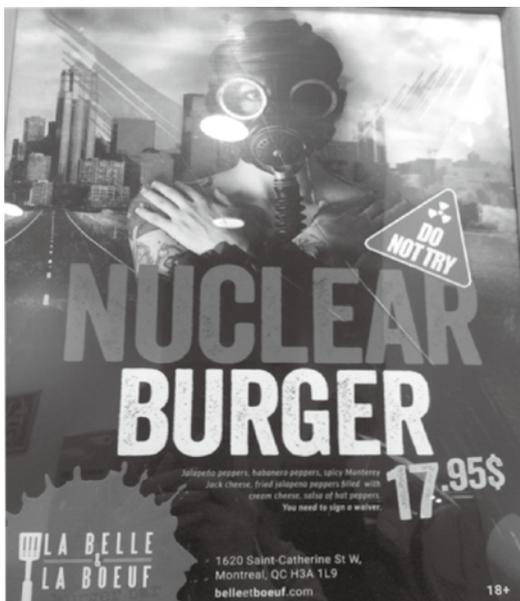


図7 コンコルディア大学構内の広告（2018年11月4日に筆者撮影）

ス語憲章によって、ケベック州内で英語のみの広告は基本的に見受けられないが、本広告にフランス語は含まれず、英語のみである。構外では図8や図9のようにフランス語が目立つように記載されている表示も見受けられた。しかし図9の下に簡易的に貼られている図10は英語が上、つまり丹波（2014）に従えば、英語がより目立つようになっている。また図11はコンコルディア大学周辺にある店舗で撮影した求人広告である。英語の記述である“OPENNING SOON”と“Full time”、“Part time”、“call”、“or”、“Email”に該当するフランス語は見当たらず、Reh（2004）に基けば断片的タイプに分類される。先述した通り、丹羽（2014, p. 183）は「正確にまったく同じ情報量を与えるかどうかは、その情報の送り手が各言語を同等に重視するかという意識をかなり反映する。」と述べているが、情報の送り手であるこの店舗の雇用主は、フランス語よりも英語を話せる従業員、つまりフランス語よりも英語を重視していると考察でき



図8 コンコルディア大学から Sainte-Catherine 通りに出たところにある立てかけ看板
(2018年11月4日に筆者撮影)

る。そして図 12 はコンコルディア大学近辺（構外）にある店舗で撮影したもののだが、英語と中国語のみが使用され、フランス語が見受けられない。店舗のホームページを調査したところ、Facebook 上の投稿でも英語と中国語が主に使用されていた。そして注文時にフランス語母語話者である筆者の友人が店員



図 9 コンコルディア大学から Maisonneuve 通りに出たところにあるバス停（2019 年 11 月 24 日に筆者撮影）



図 10 図 9 の右下にあり、テープで簡易的に付けられている（2018 年 11 月 7 日に筆者撮影）

にフランス語で話しかけても、店員は英語で返事をしていった。しかし、同じ店舗で撮影した卓上メニュー（図13）ではフランス語が使用されており、フランス語憲章に違反しないようにフランス語を使用したと考察できる。

つまり、フランス語系大学ではフランス語のみであり、英語系大学の構内はフランス語が使用されることもあるが、基本的に英語が優先される。また英語

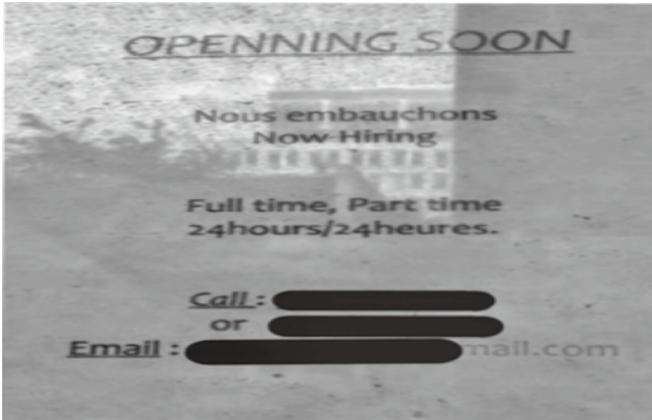


図11 コンコルディア大学近辺の店舗の求人広告。電話番号とメールアドレスは隠しの加工を行った。（2013年9月に筆者撮影）



図12 コンコルディア大学近辺の店舗の冊子メニュー（2018年11月4日に筆者撮影）

系大学の構外では、フランス語が目立つように書かれている場合も含めて両言語が使用されることもある。しかし、実際には英語が主に使用され、フランス語は Landry & Bourhis (1997) が述べているデザインとしての言語使用と化している可能性を示唆できる。



図13 図12と同じ店舗の卓上メニュー
(2018年11月4日に筆者撮影)

3-2. Sainte-Catherine 通りの看板分析

先述した通り、モンREALではフランス語のみならず英語も広く使われている。しかしそれはケベック州フランス語局 (2000, 2012, 2016, 2018) が指摘している通り、地域ごとにフランス語や英語の使用率は異なる。その地域が分かれる言語境界線と言われているのが、モンREALの南北を通る Saint-Laurent 通りである。そこで、Saint-Laurent 通りを含み、またコンコルディア大学やケベック大学モンREAL校がある繁華街として知られる Sainte-Catherine 通りを東から西へ移動をし、通りから見る事ができる店名の言語を2回にわたり分析をした。1回目は Google ストリートビューを用い、2018年の4月、9月、

10月に撮影された映像を使用した。1回目の分析では英語のみ、フランス語のみ、両言語併記（言葉遊びを含む）、特定不可（その他の言語や読み手判断、例として人名、略語、造語など）に分類をした。Sainte-Catherine 通りはおおよそ 11 km あるが、Rue Vimont を出発点とし、約 1 km ごとに以下のように区切って分析をした（図 14）。



図 14 Sainte-Catherine 通り（2023年 11月 24日に Google Map より引用。著者が調査した大通りを線で引いた。南北の点線は Saint-Laurent 通りである。）

- 1 km : Letourneux 通りまで
- 2 km : Joliette 通りまで
- 3 km : Omer-Ravary 通りまで
- 4 km : Parthenais 通りまで
- 5 km : Wolfe 通りまで
- 6 km : Saint-Laurent 通りまで
- 7 km : Robert-Bourassa 通りまで
- 8 km : Mackay 通りまで
- 9 km : Atwater 通りまで
- 10 km : Metcalfe 通りまで
- 11 km : Claremont 通りまで

分析した看板の総数は777件であり、英語のみは16%（128件）、フランス語のみは33%（255件）、両言語併記は12%（97件）、特定不可は38%（297件）であった。特定不可が最も多い件数となったが、その特定不可の看板にフランス語が少しでも含まれているのは132件であった。また1kmごとの変動（表1、図15）を分析した結果、4kmの地点で徐々にフランス語が減少することがわかった。また6km地点から特定不可の割合が上昇することが読み取ることができる。英語と両言語の割合は Sainte-Catherine 通りを東から西に移動するに伴ってゆるやかに上昇している。また5kmから9km（Parthenais 通りから Atwater 通り）地点では店舗数の割合が全体から見た時に10%を超え、また特

表1 Sainte-Catherine 通りの1km毎の割合

	フランス語 français (%)	フランス語 français	英語 anglais (%)	英語 anglais	両言語 bilingues (%)	両言語 bilingues	特定不可 indéterminable (%)	特定不可 indéterminable	看板の量の比 率 pourcentage d'affichages (%)	合計 total
1km	60,8%	31	7,8%	4	3,9%	2	27,5%	14	6,6%	51
2km	68,3%	41	5%	3	6,7%	4	20%	12	7,7%	60
3km	68,8%	11	6,3%	1	6,3%	1	18,8%	3	2,1%	16
4km	54,5%	6	9,1%	1	0%	0	36,4%	4	1,4%	11
5km	46,8%	44	17%	16	11,7%	11	24,5%	23	12,2%	94
6km	30,8%	32	13,5%	14	8,7%	9	47,1%	49	13,4%	104
7km	28,6%	22	20,8%	16	13%	10	37,7%	29	9,9%	77
8km	11,6%	17	24,5%	36	14,3%	21	49,7%	73	19,1%	147
9km	26,5%	36	14,7%	20	17,6%	24	41,2%	56	17,5%	136
10km	18,5%	12	21,5%	14	16,9%	11	43,1%	28	8,4%	65
11km	18,8%	3	18,8%	3	25%	4	37,5%	6	2,1%	16

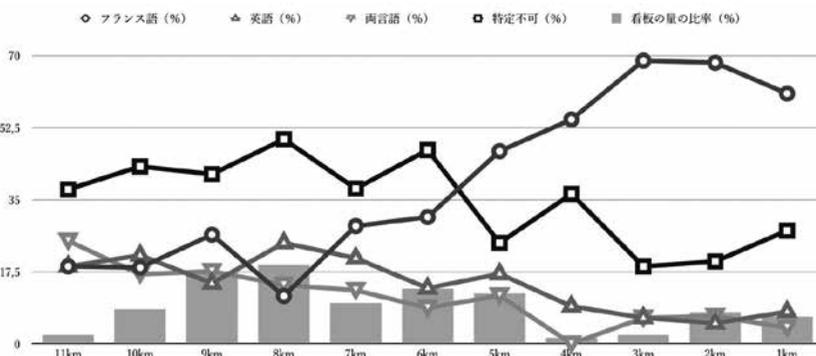


図15 Sainte-Catherine 通りの1km毎の割合
(地図に対応させるため、東側である1kmを右側に配置した)

表 2 Sainte-Catherine 通りの調査におけるブロック毎の割合
(通り番号 49 は店舗がないため表示なし)

	フランス語 (%)	英語 (%)	両言語 (%)	特定不可 (%)
39	28,6 %	14,3 %	28,6 %	28,6 %
40	60,0 %	30,0 %	0,0 %	10,0 %
41	40,0 %	33,3 %	13,3 %	13,3 %
42	55,6 %	22,2 %	0,0 %	22,2 %
43	44,4 %	22,2 %	11,1 %	22,2 %
44	40,0 %	20,0 %	20,0 %	20,0 %
45	25,0 %	0,0 %	25,0 %	50,0 %
46	25,0 %	25,0 %	0,0 %	50,0 %
47	33,3 %	13,3 %	6,7 %	46,7 %
48	30,8 %	7,7 %	23,1 %	38,5 %
50	16,7 %	0,0 %	16,7 %	66,7 %
51	30,8 %	7,7 %	0,0 %	61,5 %
52	27,3 %	18,2 %	18,2 %	36,4 %
53	25,0 %	50,0 %	0,0 %	25,0 %
54	37,5 %	25,0 %	0,0 %	37,5 %
55	37,5 %	6,3 %	6,3 %	50,0 %
56	50,0 %	33,3 %	0,0 %	16,7 %

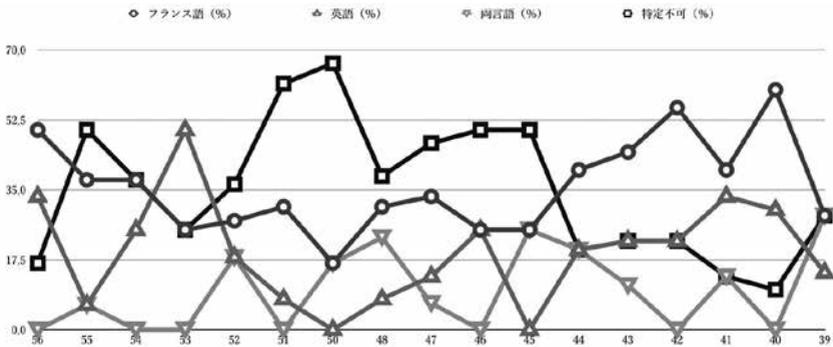


図 16 Sainte-Catherine 通りの調査におけるブロック毎の推移
(地図に対応させるため、東側である 1 km を右側に配置した)

定不可の割合が5 km 地点を除き、他の箇所と比べて最も多くなっている。

この結果より、6 km 地点に該当する Wolfe 通りから Saint-Laurent 通りがフランス語と英語の言語境界線であると仮定し、6 km 地点の約 400 m 前である Alexandre-DeSève 通りから 6 km 地点をブロックごとに番号を割り当ててデータを集め、表 2 と図 16 にまとめた。その結果、45 番から 55 番まで、特定不可の割合がフランス語と同等、もしくは超えていることがわかった。従って、Beaudry 駅付近からケベック大学モンレアル校付近の間よりフランス語の使用が減少している可能性を示唆できる。しかし、看板の調査では言語の特定に迷う場合や、特定不可の割合が予想に反して多くあり、不確実性が高いことが課題として挙げられた。また英語を公用語とする自治区である Westmount を含んでおり、モンレアルにおける各地区の特徴を踏まえた調査も求められることが分かった。

3-3. Sainte-Catherine 通りのはり紙分析

1 回目の調査を経て、より正確な結果を出すためには、さらに細かく分類して分析する必要性が明らかになった。そのため、より言語を特定しやすい掲示物であるはり紙に絞って、2019 年 11 月 17 日から 2019 年 11 月 30 日まで現地に滞在して調査を行った。対象としたはり紙は、店舗の開店時間掲示、開店や閉店等の掲示、ドアにある「押す」「引く」や「他のドアをご利用ください」等の掲示、外から見ることができメニューや店舗の壁に書かれている取扱品物掲示、従業員募集、割引やセール表示に使用されている言語である（以下順に時間 Heures、開閉店 Ouvert、ドア Tirez、メニュー Carte、採用 Emploi、割引 En Rabais と表記）。そして書かれている言語がフランス語のみ（仏 F）、英語のみ（英 A）、フランス語が上位若くはより大きく書かれている両言語併記（仏英 F&A）、英語が上位若くはより大きく書かれている両言語併記（英仏 A&F）と区別した。

まずパイロットテストとして、モンレアルの観光地として頻繁に紹介される Vieux-Port (*Old Port*) とゲイタウンとして有名な Le Village (*The Village*) のはり紙調査を行った。Vieux-Port においては Saint-Paul 通りの Bonsecours 通りから McGill 通りまで（表 3）、Le Village は Sainte-Catherine 通りの Cartier 通りから St. Timothée 通りまで（表 4）において、はり紙調査を行った。分析したはり紙の種類は、Vieux-Port の後に行った Le Village の調査時より割引 (En Rabais) を追加したため、単純な比較はできない。しかしながら同じ観光地であっても Le Village のフランス語使用は 74.4% であるのに対し、Vieux-Port は

表3 Vieux-Port (la rue Saint Paul, de la rue Bonsecours から à la rue McGill) に
おける言語景観の調査結果

	仏(%) F	仏 F	英(%) A	英 A	仏英 (%) F&A	仏英 F&A	英仏 (%) A&F	英仏 A&F	合計 total
時間 Heures	34,5 %	10	3,4 %	1	62,1 %	18	0,0 %	0	29
開閉店 Ouvert	38,2 %	13	11,8 %	4	50,0 %	17	0,0 %	0	34
ドア Tirez	45,5 %	10	22,7 %	5	31,8 %	7	0,0 %	0	22
メニュー Carte	32,9 %	23	11,4 %	8	52,9 %	37	2,9 %	2	70
採用 Emploi	40,0 %	2	40,0 %	2	0,0 %	0	20,0 %	1	5
合計 total	36,3 %	58	12,5 %	20	49,4 %	79	1,9 %	3	160

表4 Le village (la rue St. Catherin, de la rue Cartier から à la rue St. Timothée) に
おける言語景観の調査結果

	仏(%) F	仏 F	英(%) A	英 A	仏英(%) F&A	仏英 F&A	英仏(%) A&F	英仏 A&F	合計 total
時間 Heures	83,6 %	46	0,0 %	0	16,4 %	9	0,0 %	0	55
開閉店 Ouvert	76,5 %	13	0,0 %	0	11,8 %	2	11,8 %	2	17
ドア Tirez	85,7 %	24	0,0 %	0	14,3 %	4	0,0 %	0	28
メニュー Carte	65,5 %	36	3,6 %	2	29,1 %	16	1,8 %	1	55
採用 Emploi	33,3 %	2	16,7 %	1	50,0 %	3	0,0 %	0	6
割引 En Rabais	57,1 %	4	14,3 %	1	14,3 %	1	14,3 %	1	7
合計 total	74,4 %	125	2,4 %	4	20,8 %	35	2,4 %	4	168

表5 Sainte-Catherine 通りにおけるはり紙調査の結果

	仏F (%)	仏F	英A (%)	英A	仏英F&A (%)	仏英F&A	英仏A&F (%)	英仏A&F	合計 total
Le Village(Cartier - St. Timothée)	74,4 %	125	2,4 %	4	20,8 %	35	2,4 %	4	168
St. Timothée - Berri	81,1 %	43	1,9 %	1	17,0 %	9	0,0 %	0	53
UQAM (St. Denis - FHôtel-de-ville)	83,7 %	41	2,0 %	1	14,3 %	7	0,0 %	0	49
FHôtel-de-ville - St. Urbain	66,7 %	32	10,4 %	5	22,9 %	11	0,0 %	0	48
St. Urbain - De Beury	61,1 %	22	11,1 %	4	27,8 %	10	0,0 %	0	36

36.3%である。また Vieux-Port では49.4%とほぼ過半数で仏英の使用が見受けられた。Le Villageはゲイタウンであり、出会いの場所でもある。つまり、モンレアルへの観光客のみならず、フランス語を話す現地人もクラブやバーでの出会いや飲酒を目的として滞在すると考える。つまり、Landry & Bourhis (1997)に従えば、情報を得るための言語としてフランス語も多く使われていると解釈できる。それに対してVieux-Portは観光地であって、滞在する現地人は少ないと推測でき、メニューや時間など観光客が文字を通して理解しなく

てはいけない情報で英語が使用されたのだろう。しかし、開閉店（Ouvert）など言語以外の情報で状況が理解できる表示に関しては、Landry & Bourhis (1997) や Backhaus (2008) が述べているように、ケベック州を象徴するデザインとしてのフランス語が使用されたとも解釈できる。

パイロットテストを行った後、Sainte-Catherine 通りのほり紙調査で特に変化が見受けられた Papineau 駅（Cartier 通り）から Place-des-Arts 駅（De Bleury 通り）間で調査を行い、Le Village（Cartier 通りから St. Timothée 通り）、St. Timothée 通りから Berri 通り、UQAM（St. Denis 通りから l'Hôtel-de-ville 通り）、l'Hôtel-de-ville 通りから St. Urbain 通り、St. Urbain 通りから De Bleury 通りの 5 区域に分けた（図 17）。Le Village の仏英は 20.8%（35 件）であるが、その割合は UQAM までで少しずつ低下する。しかし l'Hôtel-de-ville 通りから St. Urbain 通りにて英語が一気に 10% を超え、再び仏英の使用が増える。この l'Hôtel-de-ville 通りから St. Urbain 通りには、フランス語の地域と英語の地域の言語境界線だと言われている Sainte-Lawrence 通りが含まれる。つまり、店名調査において言語境界線が東部へ移動している可能性があると言ったが、ほり紙調査では Sainte-Lawrence 通りのままであると考えることができる。この結果より、言語景観の量的調査を行う際には、分析の対象を 1 種類のみならず、様々な種類を対象とすることが求められるといえる。

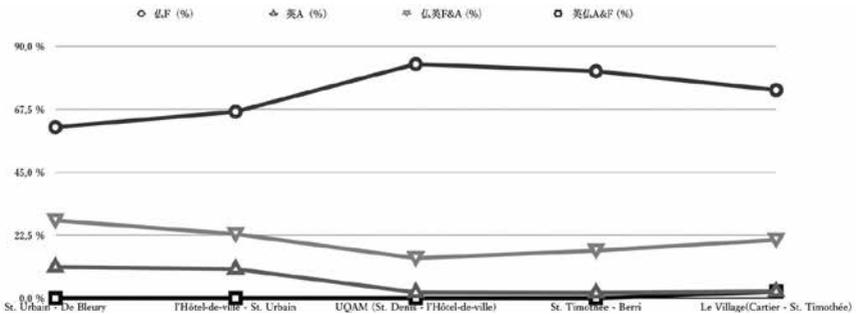


図 17 Sainte-Catherine 通りにおけるほり紙調査の推移
 (地図に対応させるため、東側である Le Village を右側に配置した)

また書き言葉のみならず、話し言葉による言語使用を分析するため、店舗における言語選択の観察を行った。現地人が頻繁に行くであろうと思われるチェーン店のカフェを対象として選び、フランス語のみで注文が行われているか、英語のみか、フランス語が中心だがいくつかの単語のみは英語か、または

表6 Le village の Tim Hortons (1252 rue Sainte-Catherine E) における調査結果

	仏(%) F	仏 F	英(%) A	英 A	仏英(%) F&A	仏英 F&A	英仏(%) A&F	英仏 A&F	"Allô"(%)	"Allô"	合計(%) Total	合計 Total
挨拶の言語 <i>Prise de contact</i>	83,3 %	25	10,0 %	3	0,0 %	0	0,0 %	0	6,7 %	2	100,0 %	30

表7 Le village の Second Cup (1351 rue Sainte-Catherine E) における調査結果

	仏(%) F	仏 F	英(%) A	英 A	仏英(%) F&A	仏英 F&A	英仏(%) A&F	英仏 A&F	合計(%) Total	合計 Total
挨拶の言語 <i>Prise de contact</i>	93,8 %	30	6,3 %	2	0,0 %	0	0,0 %	0	100,0 %	32

英語が中心だがいくつかの単語はフランス語のみかの4つに分類した（順に仏F、英A、仏英F&A、英仏A&Fと表記）。まずパイロットテストとして、Le Villageにある店舗であり、Beaudry駅から近いTim Hortons (1252 Rue Sainte-Catherine E) と Second Cup (1351 Rue Sainte-Catherine E) で2019年11月18日に調査を行った。両チェーン店とも、はり紙調査においては仏英の使用が多く、英仏や英語のみの使用も見受けられた箇所である。しかしながら本言語観察調査においては、ほぼすべての会話においてフランス語が使用されていた。つまり、書き言葉における言語の使用量と、話し言葉における言語の使用量は異なる可能性があり、モンレアルのような多言語が使われている地域にて言語景観の調査を行う際には、書き言葉のみならず、話し言葉の調査も行う必要性を示唆できる。

4. モンレアルの地域別調査

4-1. 調査方法

モンレアルにおけるフランス語と英語の使用状況を分析するために、Westmount、Mile End、Parc 駅、Snowdon 駅、Petite-Italie において、はり紙調査（書き言葉）と言語選択調査（話し言葉）の調査を2019年11月17日から2019年11月30日に行った（図18）。特に言語選択調査はパイロットテストの結果を踏まえ、チェーン店のカフェ（Tim Hortons、Second Cup、Starbucks）における客と店員のやりとりにおけるデータを収集し、注文時の最初の挨拶、商品注文時、別れの挨拶の3つに分類した。そして①フランス語のみ、②英語のみ、③フランス語が優位であるが英語がある、④英語が優位だがフランス語もある、⑤“(H) Allô”、の5パターンに分類した（以下順に仏F、英A、仏英F&A、英仏A&F、“(H) Allô”と表記）。挨拶の言語では、“Bonjour-

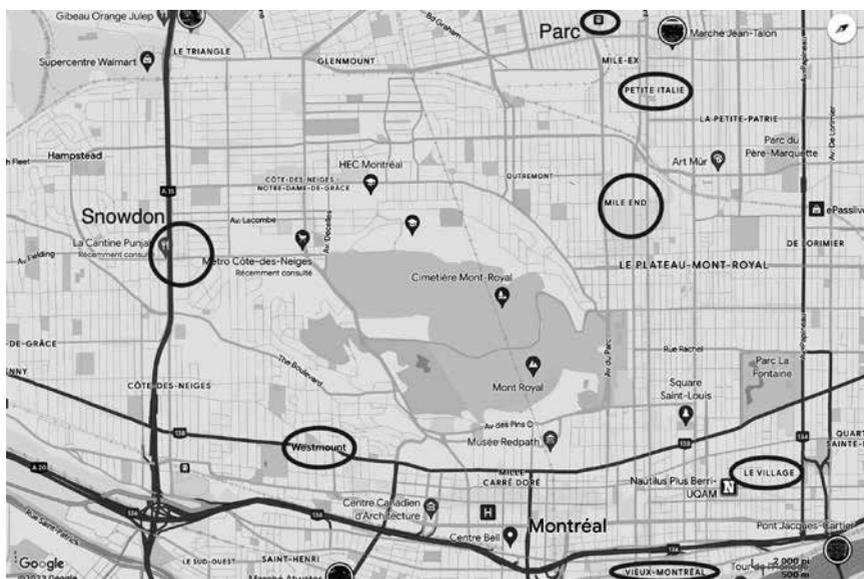


図 18 モンレアルの調査地（2023年11月24日にGoogle Mapより引用。著者が調査地の名称を加筆し、また線を引いた）

Hello”、“Hello-Bonjour”の順により判断し、前者を③仏英F&A、後者を④英仏A&Fと分類した。また言語選択の変化を可視化するために、表及びフローチャートを作製した。

それぞれの調査対象地の比較を行うために、カナダ連邦統計局（Statistics Canada, *Statistics Canada*）によって行われた国勢調査（Recensement, *Census*）のデータを使用する。国勢調査は5年ごとに実施されるため、今回は現地調査を行なった2019年に最新のものであった2016年のものを使用する。また、統計データにはいくつかの地区分けが採用されている。今回は調査対象地の通りをそれぞれ含みつつ、より細かく分析を行うため、人口が10,000人以下で分けられている「国勢調査セクター」（Secteur de recensement, *Census Tracts*）を使用する。国勢調査の各項目のうち、今回使用するのは公用語の知識（*Connaissance des langues officielles, Knowledge of official languages*）、母語（*Langue maternelle, Mother tongue*）、家庭で最も使用する言語（*Langue parlée le plus souvent à la maison, Language spoken most often at home*）、職場で最も使用する言語（*Langue le plus souvent utilisée au travail, Language used most often at work*）、家庭で他に使用する言語（*Autre langue parlée*）

régulièrement à la maison, *Other language spoken regularly at home*)、職場で他に使用する言語 (*Autre langue utilisé régulièrement au travail, Other language used regularly at work*)、移民 (*Immigrants, Immigrant*) と一時滞在者 (*Résidents non permanents, Non-permanent residents*)、そして2015年度に得た年収の中央値 (*Revenu total médian en 2015 parmi les bénéficiaires, Median total income in 2015 among recipients*) である。「公用語の知識」は会話を行うことのできる言語とされており、母語は「幼少期、最初に家庭で習得し、現在でも理解できる言語」(*“la première langue apprise à la maison dans l’enfance et encore comprise par la personne au moment où les données sont recueillies.”*, *“the first language learned at home in childhood and still understood by the person at the time the data was collected.”*) である。そのため、国勢調査の質問表において、公用語の知識に分類されている質問は「この人物は会話を行うために十分なフランス語または英語の知識があるか」(*“Cette personne connaît-elle assez bien le français ou l’anglais pour soutenir une conversation?”*, *“Can this person speak English or French well enough to conduct a conversation?”*) であり、母語に分類される質問は「この人物が最初に幼少期の家庭で習得し、現在でも理解できる言語はどれか」(*“Quelle est la langue que cette personne a apprise en premier lieu à la maison dans son enfance et qu’elle comprend encore?”*, *“What is the language that this person first learned at home in childhood and still understands?”*) と記載されている。また注意書きとして、「最初に習得した言語を現在理解できない場合には、2番目に習得した言語を記載せよ」(*“Si cette personne ne comprend plus la première langue apprise, indiquez la seconde langue qu’elle a apprise.”*, *“If this person no longer understands the first language learned, indicate the second language learned.”*) とある。カナダ統計局によれば、また一時滞在者 (*Résident non permanent, Non-permanent resident*) は就労ビザや修学ビザ、または難民申請をしている者、そしてその家族である。また、国勢調査の質問表には記載がないが、カナダ統計局が独自に算出した「話すことのできる第一公用語」(*Première langue officielle parlée, First official language spoken*) がある。これは①会話を行うことのできる公用語がフランス語または英語の場合、②両カナダ連邦公用語で会話を行うことができるが母語がフランス語または英語の場合、③両カナダ連邦公用語で会話を行うことはできないが母語がフランス語または英語の場合、または④家庭で一番多く使われる言語がフランス語、または英語の場合に分類される。しかしながら今回はカフェでの注文時に

使用されている言語の分析を行うため、労働言語について言及されていない本分類は使用しない。また今回は英語（Anglais）、フランス語（Français）、公用語以外（Langues non officielles, Ni anglais ni français）の項目のみ、公用語の知識や母語はそれに加えて英語とフランス語（Anglais et français）の項目を参照した。

4-2. モンレアル全体の傾向

まず表8を用いてモンレアル島をケベック州全体のデータと比較した際、公用語の知識は英語のみと両連邦公用語、また両連邦公用語以外の言語の割合が上回っており、フランス語のみは3割程度である。母語は両連邦公用語以外の言語の割合が32.8%、英語は16%とケベック州全体よりも高い。対してモンレアルのフランス語母語話者は46.4%であり、ケベック州全体は77.1%と大幅に低い。モンレアルにおける家庭と職場でのフランス語使用率は約5割だが、英語のみとそれ以外の言語の使用の割合がケベック州全体よりも高く、職場における2番目の言語は英語が多い。年収はケベック州全体の平均よりも少なく、移民が多いことが特徴的である。

書き言葉調査では、合計1222件のはり紙を調査した。そのうち、フランス語は770件（63%）、英語は109件（8.9%）、仏英は322件（26.3%）、英仏は21件（1.7%）であった。書き言葉の調査においても、モンレアルではフランス語がより目につく地域であるといえる。

4-3. Westmount

Westmount（表9）は市街地の東にあり、最寄りの駅はAtwater駅である。モンレアル島内において自治を保つ英語を公用語とする地区であり、調査を行った地域が含まれる国勢調査セクター4620351.00には4984人が住んでいる。カナダ連邦の両公用語で会話を行える者が大半を占めるが、家庭や職場では英語を優先的に使用する者が多い。経済的に裕福な地区として知られ、2015年における年収の中央値は46859カナダドルであり、これはモンレアルの年収中央値である29198カナダドルよりも大幅に高い。また一時滞在者が多いことも特徴的である。

Atwater駅から近いGreene通りにあるStarbucks（1233 Avenue Greene）にて言語選択観察を行い、表10と図19にまとめた。このカフェでは11月21日の15時から16時30分まで観察を行い、32人の客の言語選択を観察した。店員は最大3名で接客を行っており、店員同士の会話は英語のみで行われていた。

フランス語フランス文化研究

表8 モンレアルとケベック州の国勢調査

	Montréal, TE (Divisions de recensement)		Québec (Données provinciales)	
人口 Population		1 942 044		8 164 361
公用語の知識 Connaissance des langues officielles	100,0 %	1 680 910	100,0 %	8 066 560
英語のみ Anglais seulement	10,1 %	170 490	4,6 %	372 445
フランス語のみ Français seulement	29,9 %	503 105	50,0 %	4 032 640
英語とフランス語 Anglais et français	57,4 %	965 480	44,5 %	3 586 410
英語でもフランス語でもない Ni anglais ni français	2,5 %	41 835	0,9 %	75 065
母語 Langue maternelle	100,0 %	1 914 760	100,0 %	8 066 555
英語 Anglais	16,0 %	307 080	7,5 %	601 155
フランス語 Français	46,4 %	888 515	77,1 %	6 219 665
公用語以外 Langues non officielles	32,8 %	627 490	13,2 %	1 060 830
英語とフランス語 Anglais et français	1,3 %	25 185	0,9 %	72 395
家庭で最も使用する言語 Langue parlée le plus souvent à la maison	100,0 %	1 914 760	100,0 %	8 066 560
英語 Anglais	22,8 %	437 070	9,7 %	782 185
フランス語 Français	49,8 %	953 130	79,0 %	6 375 665
公用語以外 Langues non officielles	18,3 %	349 915	7,3 %	585 890
家庭で他に使用する言語 Autre(s) langue(s) parlée(s) régulièrement à la maison	100,0 %	1 914 760	100,0 %	8 066 555
特になし Aucune	70,9 %	1 358 395	84,6 %	6 825 240
英語 Anglais	8,6 %	164 875	6,4 %	513 410
フランス語 Français	8,2 %	156 830	4,0 %	320 370
公用語以外 Langues non officielles	9,6 %	183 265	3,9 %	317 790
職場で最も使用する言語 Langue utilisée le plus souvent au travail	100,0 %	1 074 970	100,0 %	4 529 770
英語 Anglais	27,2 %	292 300	12,0 %	541 720
フランス語 Français	56,7 %	609 070	79,7 %	3 611 990
公用語以外 Langues non officielles	1,3 %	13 575	0,8 %	34 160
職場で他に使用する言語 Autre(s) langue(s) utilisée(s) régulièrement au travail	100,0 %	1 074 970	100,0 %	4 529 770
特になし Aucune	54,5 %	585 490	68,6 %	3 107 035
英語 Anglais	26,9 %	289 290	22,8 %	1 031 380
フランス語 Français	14,8 %	159 505	7,0 %	317 490
公用語以外 Langues non officielles	2,6 %	27 455	1,1 %	49 850
年収の中央値 Revenu total médian (CA\$)		29 198		32 975
移民 Immigrants	34,0 %	644 680	13,7 %	1 091 310
一時滞在者 Résidents non permanents	9,8 %	63 060	7,9 %	86 065

表 9 Westmount の国勢調査

	Westmount	
人口 Population		4 984
公用語の知識 Connaissance des langues officielles	100,0 %	4 985
英語のみ Anglais seulement	25,4 %	1 265
フランス語のみ Français seulement	3,4 %	170
英語とフランス語 Anglais et français	70,3 %	3 505
英語でもフランス語でもない Ni anglais ni français	0,8 %	40
母語 Langue maternelle	100,0 %	4 985
英語 Anglais	49,0 %	2 445
フランス語 Français	18,1 %	900
公用語以外 Langues non officielles	27,5 %	1 370
英語とフランス語 Anglais et français	1,5 %	75
家庭で最も使用する言語 Langue parlée le plus souvent à la maison	100,0 %	4985
英語 Anglais	62,0 %	3090
フランス語 Français	16,8 %	835
公用語以外 Langues non officielles	14,2 %	710
家庭で他に使用する言語 Autre(s) langue(s) parlée(s) régulièrement à la maison	100,0 %	4985
特になし Aucune	69,9 %	3485
英語 Anglais	9,7 %	485
フランス語 Français	8,9 %	445
公用語以外 Langues non officielles	8,1 %	405
職場で最も使用する言語 Langue utilisée le plus souvent au travail	100,0 %	2 365
英語 Anglais	64,7 %	1 530
フランス語 Français	21,6 %	510
公用語以外 Langues non officielles	42,3 %	10
職場で他に使用する言語 Autre(s) langue(s) utilisée(s) régulièrement au travail	100,0 %	2365
特になし Aucune	47,4 %	1120
英語 Anglais	16,7 %	395
フランス語 Français	31,9 %	755
公用語以外 Langues non officielles	2,1 %	50
年取の中央値 Revenu total médian (CA\$)		46 859
移民 Immigrants	35,2 %	1 745
一時滞在者 Résidents non permanents	11,2 %	195

最初の挨拶ではフランス語が43.8%（14件）、英語のみが50.0%（16件）、仏英が6.3%（2件）であった。最初の挨拶において客から挨拶を行ったのは18件（56.3%）、店員からの挨拶は14件（43.8%）である。このデータから、店

表 10 Westmount の Starbucks (1233 Avenue Greene) における調査の結果

	仏(%) F	仏 F	英(%) A	英 A	仏英(%) F&A	仏英 F&A	英仏(%) A&F	英仏 A&F	"(B)A(B)" (%)	"(B)A(B)"	合計 Total (%)	合計 Total
挨拶の言語 <i>Prise de contact</i>	43,8 %	14	50,0 %	16	6,3 %	2	0,0 %	0	0,0 %	0	100,0 %	32
(客からの挨拶) (<i>Par un client / une cliente</i>)	12,5 %	4	40,6 %	13	3,1 %	1	0,0 %	0	0,0 %	0	56,3 %	18
(店員からの挨拶) (<i>Par une serveuse / un serveur</i>)	31,3 %	10	9,4 %	3	3,1 %	1	0,0 %	0	0,0 %	0	43,8 %	14
注文時の言語 <i>Commande</i>	18,8 %	6	81,3 %	26	0,0 %	0	0,0 %	0	n/a	n/a	100,0 %	32
(挨拶と同じ言語の使用) (<i>une même langue avec « prise de contact »</i>)	18,8 %	6	50,0 %	16	0,0 %	0	0,0 %	0	n/a	n/a	68,8 %	22
(挨拶と異なる言語の使用) (<i>une langue différente avec « prise de contact »</i>)	0,0 %	0	31,3 %	10	0,0 %	0	0,0 %	0	n/a	n/a	31,3 %	10
別々の言語 <i>Saturation finale</i>	22,2 %	6	77,8 %	21	0,0 %	0	0,0 %	0	n/a	n/a	100,0 %	27

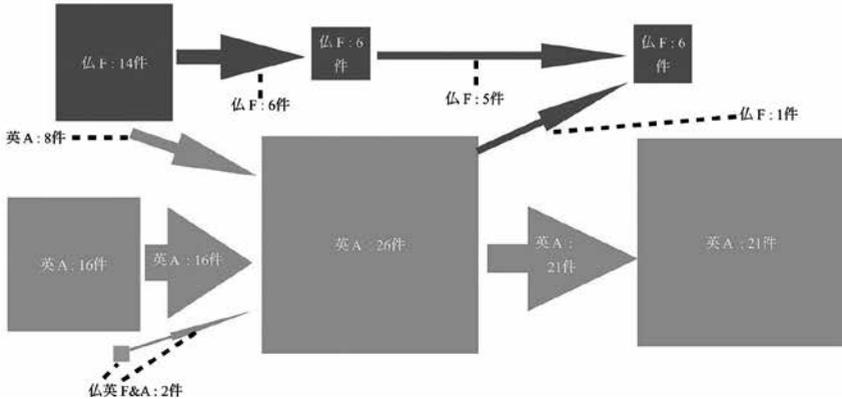


図 19 Westmount のカフェにおける言語選択のフローチャート

表 11 Westmount (la rue Greene の la rue St-Catherine から la rue Sherbrooke まで) における言語景観のデータ

	仏(%) F	仏 F	英(%) A	英 A	仏英(%) F&A	仏英 F&A	英仏(%) A&F	英仏 A&F	合計 total
時間 <i>Heures</i>	58,8 %	20	2,9 %	1	35,3 %	12	2,9 %	1	34
開閉店 <i>Ouvert</i>	28,6 %	2	14,3 %	1	57,1 %	4	0,0 %	0	7
ドア <i>Tirez</i>	20,0 %	1	0,0 %	0	80,0 %	4	0,0 %	0	5
メニュー <i>Carte</i>	48,3 %	14	10,3 %	3	41,4 %	12	0,0 %	0	29
採用 <i>Emploi</i>	0,0 %	0	33,3 %	1	66,7 %	2	0,0 %	0	3
割引 <i>En Rabais</i>	0,0 %	0	100,0 %	1	0,0 %	0	0,0 %	0	1
合計 total	46,8 %	37	8,9 %	7	43,0 %	34	1,3 %	1	79

員からはフランス語の挨拶を行うが（31.3%、10件）、客は英語の挨拶を選ぶ事例が多かったことがわかる（40.6%、13件）。また店員は自分から進んで挨拶をするケースと、黙って客の選択を待つケースが見受けられた。また仏英や英仏はあまり見受けられず、フランス語か英語のみであった。注文時にはフランス語が18.8%（6件）、英語が81.3%（26件）であり、注文時には英語の使用が多く見受けられた。英語での挨拶に対し、フランス語を選択して注文する事例は見受けられず、フランス語で挨拶をした場合にはそのままフランス語で注文が継続されていた。別れの挨拶はフランス語が22.2%（6件）、英語が77.8%（21件）であり、注文時に選択した言語がそのまま使用されていることがわかる。別れの言語では、データが取れなかった、または注文が成立しなかったために5件少ない27件のデータで計算をしている。

はり紙調査はGreene通りのSt. Catherine通りからSherbrooke通りで行い、その結果を表11にまとめた。フランス語と仏英の使用が合計89.8%（71件）であり、英語話者や家庭と職場での英語使用が多い地域であるのにもかかわらず、フランス語が目立つはり紙が多く見受けられた。国勢調査ではフランス語と英語の両言語で会話を継続できるほどの知識がある者が70.3%（3505人）と過半数を占めており、フランス語で記述されているはり紙でも理解できる者が多いことから発生した現象だろう。また採用に分類した従業員募集のはり紙では仏英のもの（2件）も見受けられた。ここからフランス語と英語の両公用語を話せる人物が求められていると考えられる。

4-4. Mile End

Mile End（表12）はMont-Royal駅とLaurier駅の間あたりにある地区である。国勢調査セクターでは4620168.00、4620363.00、4620165.00、4620169.00、4620170.00に相当し、14604人が住んでいる。両連邦公用語の知識があると回答した者が65.8%とモンレアル全体よりも高いが、両連邦公用語の知識がないと回答した者が4.9%であり、モンレアル全体（2.5%）より多いことも特徴的である。母語としてフランス語を選択した者が41.5%であるが、英語話者（20.5%）以上に両連邦公用語以外を母語としている者が34.3%と多く、家庭でも連邦公用語以外の言語のみで会話をすることが多い（23.3%）。また職場ではフランス語が多く使用されているが（48.2%）、連邦公用語以外の言語で勤務をしている者も4.0%と多い。このような回答が多く見受けられても、モンレアル全体と比較して、移民の率が他の地域に比べて少ない（23.5%）のが特徴的である。また母語としてのフランス語話者が41.5%なのに対し、48.2%が

表 12 Mile End の国勢調査

	Mile End	
人口 Population		14604
公用語の知識 Connaissance des langues officielles	100,0 %	14590
英語のみ Anglais seulement	18,7 %	2735
フランス語のみ Français seulement	10,5 %	1535
英語とフランス語 Anglais et français	65,8 %	9600
英語でもフランス語でもない Ni anglais ni français	4,9 %	715
母語 Langue maternelle	100,0 %	14595
英語 Anglais	20,5 %	2995
フランス語 Français	41,5 %	6060
公用語以外 Langues non officielles	34,3 %	5010
英語とフランス語 Anglais et français	1,6 %	230
家庭で最も使用する言語 Langue parlée le plus souvent à la maison	100,0 %	14595
英語 Anglais	28,0 %	4090
フランス語 Français	43,3 %	6320
公用語以外 Langues non officielles	23,3 %	3395
家庭で他に使用する言語 Autre(s) langue(s) parlée(s) régulièrement à la maison	100,0 %	14605
特になし Aucune	67,9 %	9910
英語 Anglais	14,5 %	2115
フランス語 Français	6,7 %	985
公用語以外 Langues non officielles	8,6 %	1250
職場で最も使用する言語 Langue utilisée le plus souvent au travail	100,0 %	8425
英語 Anglais	36,4 %	3070
フランス語 Français	48,2 %	4060
公用語以外 Langues non officielles	4,0 %	335
職場で他に使用する言語 Autre(s) langue(s) utilisée(s) régulièrement au travail	100,0 %	8425
特になし Aucune	49,5 %	4170
英語 Anglais	29,8 %	2510
フランス語 Français	16,0 %	1345
公用語以外 Langues non officielles	3,1 %	260
年収の中央値 Revenu total médian (CA\$)		31497
移民 Immigrants	23,5 %	3370
一時滞在者 Résidents non permanents	5,5 %	785

表 13 Mile End の Starbucks (5101 Av du Parc) における調査の結果

	仏(%) F	仏 F	英(%) A	英 A	仏英 (%) F&A	仏英 F&A	英仏 (%) A&F	英仏 A&F	"Allô" (%)	"Allô"	合計 (%) Total	合計 Total
挨拶の言語 Prise de contact	100,0 %	35	0,0 %	0	0,0 %	0	0,0 %	0	0 %	0	100,0 %	35
(客からの挨拶) (Par un client / une cliente)	5,7 %	2	0,0 %	0	0,0 %	0	0,0 %	0	0 %	0	91,4 %	32
(店員からの挨拶) (Par une serveuse / un serveur)	91,4 %	32	0,0 %	0	0,0 %	0	0,0 %	0	0 %	0	91,4 %	32
注文時の言語 Commande	71,4 %	25	22,9 %	8	5,7 %	2	0,0 %	0	n/a	n/a	100,0 %	35
(挨拶と同じ言語の使用) (une même langue avec « prise de contact »)	71,4 %	25	0,0 %	0	0,0 %	0	0,0 %	0	n/a	n/a	71,4 %	25
(挨拶と異なる言語の使用) (une langue différente avec « prise de contact »)	0,0 %	0	22,9 %	8	5,7 %	2	0,0 %	0	n/a	n/a	28,6 %	10
別れの言語 Salutation finale	76,5 %	26	23,5 %	8	0,0 %	0	0,0 %	0	n/a	n/a	100,0 %	34

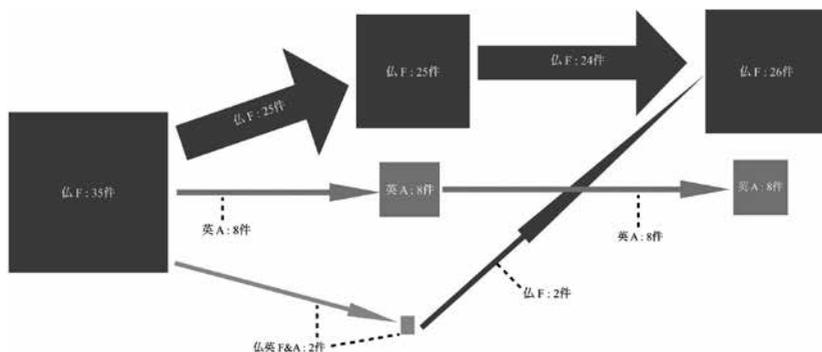


図 20 Mile End のカフェにおける言語選択のフローチャート

表 14 Mile End (l'avenue Laurier O le boulevard St-Laurent から l'avenue de l'Épée まで) における言語景観のデータ

	仏(%) F	仏 F	英(%) A	英 A	仏英 (%) F&A	仏英 F&A	英仏 (%) A&F	英仏 A&F	合計 total
時間 Heures	88,2 %	60	2,9 %	2	8,8 %	6	0,0 %	0	68
開閉店 Ouvert	50,0 %	2	0,0 %	0	50,0 %	2	0,0 %	0	4
ドア Tirez	90,9 %	10	9,1 %	1	0,0 %	0	0,0 %	0	11
メニュー Carte	78,0 %	39	4,0 %	2	18,0 %	9	0,0 %	0	50
採用 Emploi	85,7 %	6	0,0 %	0	14,3 %	1	0,0 %	0	7
割引 En Rabais	100,0 %	4	0,0 %	0	0,0 %	0	0,0 %	0	4
合計 total	84,0 %	121	3,5 %	5	12,5 %	18	0,0 %	0	144

職場でフランス語を最も使用すると回答していることから、英語話者、またはその他の言語話者が、母語ではないフランス語を使用していることも分かる。

言語選択調査（表 13 と図 20）では、5101 Avenue du Parc にある Starbucks で 11 月 22 日の 15 時から 16 時 30 分で観察を行った。店員は最大 3 名で接客をしており、店員同士はフランス語のみで会話をしていた。このカフェでの挨拶はフランス語のみであった。注文時にも 71.4%（25 件）と過半数がフランス語のまま会話が継続していた。しかし客が注文時にフランス語の単語が出てこないなど悩んでいた際には、店員はすぐに英単語を使用した（5.7%、2 件の仏英）。また、別れの言語も注文時の言語とほぼ変わらずにフランス語が 76.5%（26 件）と高かった。1 件注文が成立せずに会話が終了したため、合計は 34 件である。先述の通り、フランス語と英語で会話を行える者が多いが、両連邦公用語で会話を行えない者が他地域と比べて多いため、意思疎通ができない際には英単語をすぐに使用したと考えることもできる。

はり紙調査（表 14）では Laurier O 通りの St-Laurent 通りから de l'Épée 通りで行った。他の地域と比べてフランス語が目立つように使用されているものは合計 96.5%（139 件）と高く、そのうちフランス語のみのものが 84.0%（121 件）、仏英のものが 12.5%（18 件）であった。

4-5. Parc

Parc（表 15）はモンレアル島の北部に位置し、国勢調査セクターでは 4620220.00 と 4620221.00 に相当し、人口は 11786 人である。移民は 54.7%（6295 人）とモンレアル全体の割合よりも大幅に高い。両連邦公用語の知識がないと答えた者の割合が 8.9% とモンレアル全体よりも高く、その他の言語が母語であると申告した人は 61.7%（7250 人）であり、そのうちインド・イラン語族（ベンガル語、パンジャビ語、ウルドゥー語、タミル語）が 33.7%（2440 人）であり、ギリシャ語が 21.7%（1570 人）である。年収の中央値は 18747 カナダドルと、モンレアル全体の中央値よりも低い。職場で使用する言語は英語とフランス語がほぼ同じ割合であるが、職場で他に使用する言語は英語である場合が多い（20.6%）。しかし労働時にも 3.2% が両連邦公用語以外の言語を使用しており、これは他の地域やモンレアルの平均と比べて高いことも特記すべきだろう。

言語選択観察（表 16、図 21）は Tim Hortons（410 Rue Jean-Talon O）で行った。この Tim Hortons では 11 月 28 日 15 時から 16 時、18 時 18 分から 42 分の間で観察を行った。店員は最大 4 名で、お互いに英語で会話をしていた。店

表 15 Parc の国勢調査

	Parc	
人口 Population		11786
公用語の知識 Connaissance des langues officielles	100,0 %	11755
英語のみ Anglais seulement	28,3 %	3325
フランス語のみ Français seulement	14,2 %	1670
英語とフランス語 Anglais et français	48,5 %	5705
英語でもフランス語でもない Ni anglais ni français	8,9 %	1045
母語 Langue maternelle	100,0 %	11755
英語 Anglais	12,5 %	1475
フランス語 Français	19,8 %	2325
公用語以外 Langues non officielles	61,7 %	7250
英語とフランス語 Anglais et français	1,1 %	125
家庭で最も使用する言語 Langue parlée le plus souvent à la maison	100,0 %	11750
英語 Anglais	19,0 %	2235
フランス語 Français	23,3 %	2735
公用語以外 Langues non officielles	45,0 %	5285
家庭で他に使用する言語 Autre(s) langue(s) parlée(s) régulièrement à la maison	100,0 %	11750
特になし Aucune	66,3 %	7790
英語 Anglais	10,2 %	1200
フランス語 Français	7,6 %	895
公用語以外 Langues non officielles	12,5 %	1465
職場で最も使用する言語 Langue utilisée le plus souvent au travail	100,0 %	5700
英語 Anglais	39,6 %	2260
フランス語 Français	38,1 %	2170
公用語以外 Langues non officielles	3,2 %	180
職場で他に使用する言語 Autre(s) langue(s) utilisée(s) régulièrement au travail	100,0 %	5695
特になし Aucune	56,2 %	3200
英語 Anglais	20,6 %	1175
フランス語 Français	14,2 %	810
公用語以外 Langues non officielles	6,8 %	385
年収の中央値 Revenu total médian (CA\$)		18747
移民 Immigrants	54,7 %	6295
一時滞在者 Résidents non permanents	5,7 %	660

表 16 Parc の Tim Hortons (410 Rue Jean-Talon O) における調査の結果

	仏(%) F	仏 F	英(%) A	英 A	仏英(%) F&A	仏英 F&A	英仏(%) A&F	英仏 A&F	"(H)Allô" (%)	"(H)Allô"	合計 Total (%)	合計 Total
挨拶の言語 <i>Prise de contact</i>	44.1 %	15	32.4 %	11	2.9 %	1	8.8 %	3	11.8 %	4	100.0 %	34
(客からの挨拶) (Par un client / une cliente)	2.9 %	1	2.9 %	1	0.0 %	0	0.0 %	0	0 %	0	5.9 %	2
(店員からの挨拶) (Par une serveuse / un serveur)	41.2 %	14	29.4 %	10	2.9 %	1	8.8 %	3	11.8 %	4	94.1 %	32
注文時の言語 <i>Commande</i>	41.2 %	14	58.8 %	20	0.0 %	0	0.0 %	0	n/a	n/a	100.0 %	34
(挨拶と同じ言語の使用) (une même langue avec « prise de contact »)	29.4 %	10	26.5 %	9	0.0 %	0	0.0 %	0	n/a	n/a	55.9 %	19
(挨拶と異なる言語の使用) (une langue différente avec « prise de contact »)	11.8 %	4	32.4 %	11	0.0 %	0	0.0 %	0	n/a	n/a	44.1 %	15
別れの言語 <i>Salutation finale</i>	41.2 %	14	58.8 %	20	0.0 %	0	0.0 %	0	n/a	n/a	100.0 %	34

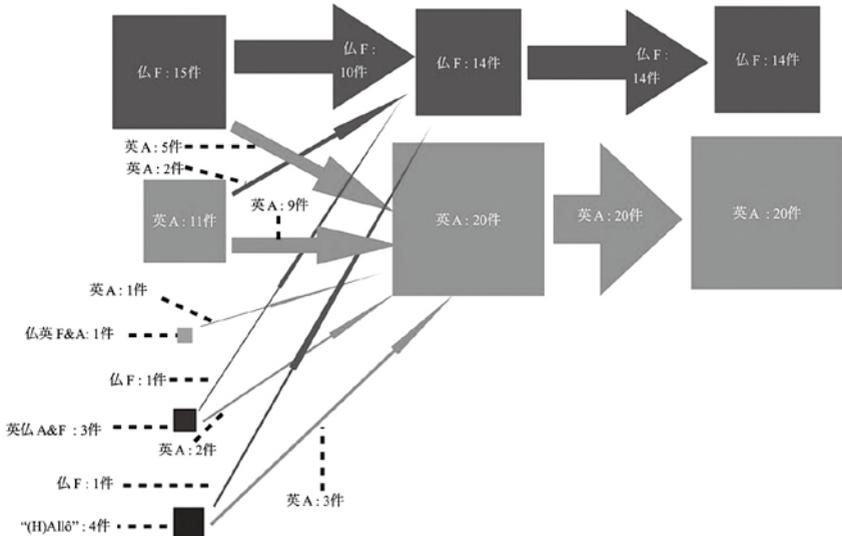


図 21 Parc のカフェにおける言語選択のフローチャート



図 22 Parc のカフェにおける“HC” (2019年11月28日に筆者撮影)

内では客同士が調査者の特定できない言語で会話を行っていたが、著者がドアを他の客のために開けた際には“Thank you”と英語で礼を述べられた。また図 22 の写真は著者が購入したホットチョコレートのカップだが、“HC” (*Hot Chocolate*) と英語が書かれていた。また店員はフランス語を最初使用していても、客が理解していないとわかるとすぐに英語に切り替えていた。加えて、

表 17 Parc (la rue Jean-Talon の la rue Hutchison から la rue l'Acadie まで) における言語景観のデータ

	仏(%) F	仏 F	英(%) A	英 A	仏英(%) F&A	仏英 F&A	英仏(%) A&F	英仏 A&F	合計 total
時間 Heures	52,6 %	30	19,3 %	11	24,6 %	14	3,5 %	2	57
開閉店 Ouvert	72,5 %	29	12,5 %	5	15,0 %	6	0,0 %	0	40
ドア Tirez	50,0 %	3	50,0 %	3	0,0 %	0	0,0 %	0	6
メニュー Carte	26,4 %	14	17,0 %	9	54,7 %	29	1,9 %	1	53
採用 Emploi	100,0 %	1	0,0 %	0	0,0 %	0	0,0 %	0	1
割引 En Rabais	35,7 %	5	42,9 %	6	21,4 %	3	0,0 %	0	14
合計 total	48,0 %	82	19,9 %	34	30,4 %	52	1,8 %	3	171



図 23 Parc のフランス語教師募集のはり紙
(2019 年 11 月 25 日に筆者撮影)

最初の挨拶は複数の種類が見受けられたことが特徴的である。そして注文時にはフランス語ではなく、英語が58.8% (20件) とより多く使用されていることがわかる。

はり紙調査 (表 17) は Jean-Talon 通りの Hutchison 通りから l'Acadie 通りで行った。英語のみの割合が19.9% (34件) と他地域に比べて多い。とりわけ割引やセールを表示を含んでいる割引のはり紙のうち、英語のみが42.9% (6件) と高い。これはこの地域に住む居住者が英語のみを話す場合が多い、または店員がフランス語を話せないために起きていると考えられる。また、調査中に店から聞こえてきたラジオは英語であった。また図 23 のように「フランス語の教師をしています」(“French Teacher For all The Family plz call”) という英語のはり紙が電柱にあったことも特徴的であり、これは国勢調査で出ているように、フランス語で会話が行うことのできない移民が多いことを反映していると考えられる。

4-6. Snowdon

Snowdon は市街地から少し離れており、国勢調査セクターの 4620113.00、4620111.00、4620114.00、4620109.00、4620110.00 に相当し、人口は 19586 人



図 24 Snowdon Deli のペーパーランチ用マット (2023年5月5日に筆者撮影)

表 18 Snowdon の国勢調査

	Snowdon	
人口 Population		19586
公用語の知識 Connaissance des langues officielles	100,0 %	19500
英語のみ Anglais seulement	21,8 %	4255
フランス語のみ Français seulement	12,0 %	2335
英語とフランス語 Anglais et français	64,2 %	12515
英語でもフランス語でもない Ni anglais ni français	2,1 %	405
母語 Langue maternelle	100,0 %	19505
英語 Anglais	24,9 %	4860
フランス語 Français	29,2 %	5690
公用語以外 Langues non officielles	39,3 %	7670
英語とフランス語 Anglais et français	1,9 %	370
家庭で最も使用する言語 Langue parlée le plus souvent à la maison	100,0 %	19505
英語 Anglais	34,8 %	6790
フランス語 Français	30,5 %	5945
公用語以外 Langues non officielles	22,9 %	4470
家庭で他に使用する言語 Autre(s) langue(s) parlée(s) régulièrement à la maison	100,0 %	19495
特になし Aucune	65,0 %	12680
英語 Anglais	11,0 %	2140
フランス語 Français	9,3 %	1820
公用語以外 Langues non officielles	11,4 %	2230
職場で最も使用する言語 Langue utilisée le plus souvent au travail	100,0 %	11770
英語 Anglais	44,9 %	5280
フランス語 Français	33,8 %	3980
公用語以外 Langues non officielles	2,0 %	235
職場で他に使用する言語 Autre(s) langue(s) utilisée(s) régulièrement au travail	100,0 %	11760
特になし Aucune	55,1 %	6485
英語 Anglais	19,0 %	2240
フランス語 Français	20,7 %	2430
公用語以外 Langues non officielles	3,3 %	390
年収の中央値 Revenu total médian (CA\$)		26664
移民 Immigrants	47,8 %	9370
一時滞在者 Résidents non permanents	5,6 %	1095



図 25 Snowdon のカフェにおける
“Restroom”
(2019 年 11 月 28 日、筆者撮影)

表 19 Snowdon の Second Cup (5071 Chemin Queen Mary) の調査の結果

	仏(%)F	仏 F	英(%)A	英 A	仏英 (%) F&A	仏英 F&A	英仏 (%) A&F	英仏 A&F	*All0 (%)	*All5 (%)	合計 (%) Total	合計 Total
挨拶の言語 <i>Prise de contact</i>	67,6%	23	29,4%	10	0,0%	0	2,9%	1	0,0%	0	100,0%	34
(客からの挨拶) (Par un client / une cliente)	14,7%	5	5,9%	2	0,0%	0	0,0%	0	0,0%	0	20,6%	7
(店員からの挨拶) (Par une serveuse / un serveur)	52,9%	18	23,5%	8	0,0%	0	2,9%	1	0,0%	0	79,4%	27
注文時の言語 <i>Commande</i>	64,7%	22	29,4%	10	5,9%	2	0,0%	0	n/a	n/a	100,0%	34
(挨拶と同じ言語の使用) (une même langue avec « prise de contact »)	55,9%	19	23,5%	8	0,0%	0	0,0%	0	n/a	n/a	79,4%	27
(挨拶と異なる言語の使用) (une langue différente avec « prise de contact »)	8,8%	3	5,9%	2	5,9%	2	0,0%	0	n/a	n/a	20,6%	7
別れの言語 <i>Salutation finale</i>	66,7%	22	33,3%	11	0,0%	0	0,0%	0	n/a	n/a	100,0%	33

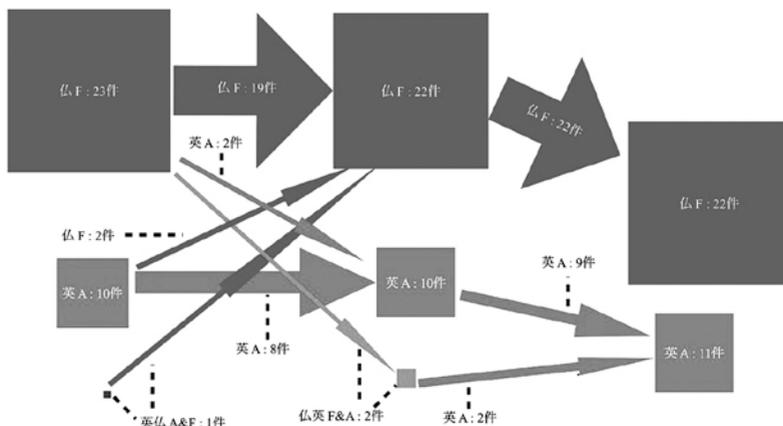


図 26 Snowdon のカフェにおける言語選択のフローチャート

である。4-3. で報告した Westmount の近くに位置し、1946 年から経営されている Snowdon Deli のペーパーランチオンマットには英語の広告が多く掲載されていた（図 24）。表 18 の国勢調査において、両連邦公用語を理解する人が 64.2% と多いが、家庭で他に使用する言語や職場で他に使用する言語において、特になしを回答する者が多く、英語かフランス語のどちらかを選択する人が多いことが読み取れる。また職場の言語において、英語が 44.9% とフランス語より高い。加えて、47.8% と移民が多い地域であり、その他の言語を母語とする人が 39.3% と多いことが特徴である。

言語選択観察（表 19 と図 26）は Second Cup（5071 Chemin Queen Mary）で行った。この Second Cup では 11 月 28 日の 15 時から 16 時、11 月 29 日の 14 時から 15 時で調査を行った。店員は常に 2 人おり、28 日ではフランス語の会話、29 日では英語の会話が見受けられた。トイレの鍵についていた札（図 25）には英語で“Washroom”と書かれていた。また筆者がその鍵を返すときに“Merci”とフランス語で述べた際には、“You're welcome”と英語で返された。この店舗でも Parc と同様に、最初の挨拶は様々な種類があるのが特徴的である。注文の 64.7%（22 件）がフランス語で過半数を超えているが、主にフランス語で会話が行われていても若干英語が使用されるケースが 5.9%（2 件）と少量ではあるが見受けられ、英語での注文は 29.4%（10 件）行われていた。

Queen Mary 通りの Clanranald 通りから Lemieux 通りまでで行ったはり紙の調査（表 20）では、国勢調査の結果に反し、フランス語のみのものが 64.1% と最も多く見受けられた。しかし、採用に関しては英語のみのものと英仏で書

表 20 Snowdon（le chemin Queen Mary の l'avenue Clanranald から la rue Lemieux まで）における言語景観のデータ

	仏(%) F	仏 F	英(%) A	英 A	仏英 (%) F&A	仏英 F&A	英仏 (%) A&F	英仏 A&F	合計 total
時間 Heures	67,9 %	57	3,6 %	3	25,0 %	21	3,6 %	3	84
開閉店 Ouvert	64,5 %	20	22,6 %	7	9,7 %	3	3,2 %	1	31
ドア Tirez	41,7 %	10	29,2 %	7	20,8 %	5	8,3 %	2	24
メニュー Carte	69,6 %	39	8,9 %	5	19,6 %	11	1,8 %	1	56
採用 Emploi	60,0 %	3	20,0 %	1	0,0 %	0	20,0 %	1	5
割引 En Rabais	55,6 %	5	11,1 %	1	33,3 %	3	0,0 %	0	9
合計 total	64,1 %	134	11,5 %	24	20,6 %	43	3,8 %	8	209

表 21 Petite-Italie の国勢調査

	Petite-Italie	
人口 Population		5820
公用語の知識 Connaissance des langues officielles	100,0 %	5815
英語のみ Anglais seulement	4,7 %	275
フランス語のみ Français seulement	20,4 %	1185
英語とフランス語 Anglais et français	73,2 %	4255
英語でもフランス語でもない Ni anglais ni français	1,9 %	110
母語 Langue maternelle	100,0 %	5815
英語 Anglais	11,0 %	640
フランス語 Français	60,4 %	3515
公用語以外 Langues non officielles	24,6 %	1430
英語とフランス語 Anglais et français	1,5 %	90
家庭で最も使用する言語 Langue parlée le plus souvent à la maison	100,0 %	5820
英語 Anglais	16,7 %	970
フランス語 Français	64,5 %	3755
公用語以外 Langues non officielles	11,7 %	680
家庭で他に使用する言語 Autre(s) langue(s) parlée(s) régulièrement à la maison	100,0 %	5820
特になし Aucune	70,7 %	4115
英語 Anglais	10,5 %	610
フランス語 Français	7,9 %	460
公用語以外 Langues non officielles	7,6 %	445
職場で最も使用する言語 Langue utilisée le plus souvent au travail	100,0 %	4240
英語 Anglais	23,6 %	1000
フランス語 Français	65,0 %	2755
公用語以外 Langues non officielles	0,9 %	40
職場で他に使用する言語 Autre(s) langue(s) utilisée(s) régulièrement au travail	100,0 %	4245
特になし Aucune	44,9 %	1905
英語 Anglais	34,0 %	1445
フランス語 Français	16,3 %	690
公用語以外 Langues non officielles	2,5 %	105
年収の中央値 Revenu total médian (CA\$)		30813
移民 Immigrants	27,1 %	1540
一時滞在者 Résidents non permanents	5,3 %	300

かれているものがそれぞれ1件ずつあることから、労働をする際には国勢調査にも現れているように英語が必要だと見受けられる。

4-7. Petite-Italie

Petite-Italie（表 21）は Jean-Talon 駅が最寄りであり、Parc 地区の近くに位置する。国勢調査セクターでは 4620219.00, 4620218.00 に相当し、人口は 5820 人である。フランス語母語話者がモンレアルの平均よりも多く、職場でも家庭でもフランス語が多く使われている。また家庭において、フランス語以外の言語が使用されることが少ない。移民が他地域に比べて少ないことも特徴的だ。

今回の観察に適したチェーン店のカフェがなかったためにはり紙調査のみ行い、St. Laurent 通りの Jean-Talon 通りから St. Zotique E 通りまでで行った（表 22）。国勢調査ではフランス語母語話者が多く、家庭においてもフランス語のみを多く使用すると出ているが、それを顕著に反映する結果であった。全体を通してみるとフランス語が 74.2%（72 件）と最も多く、その次に多いのは仏英（23.7%、23 件）である。英語のみや英仏はそれぞれ 1.0%（1 件）ずつと、他の地域と比較しても最も少ない結果となった。

表 22 Petite-Italie (la rue Sainte-Laurent の la rue Jean-Talon から la rue Saint-Zotique E まで) における言語景観のデータ

	仏(%) F	仏 F	英(%) A	英 A	仏英(%) F&A	仏英 F&A	英仏(%) A&F	英仏 A&F	合計 total
時間 Heures	71,8 %	28	0,0 %	0	28,2 %	11	0,0 %	0	39
開閉店 Ouvert	100,0 %	6	0,0 %	0	0,0 %	0	0,0 %	0	6
ドア Tirez	66,7 %	6	11,1 %	1	22,2 %	2	0,0 %	0	9
メニュー Carte	75,6 %	31	0,0 %	0	22,0 %	9	2,4 %	1	41
採用 Emploi	100,0 %	1	0,0 %	0	0,0 %	0	0,0 %	0	1
割引 En Rabais	0,0 %	0	0,0 %	0	100,0 %	1	0,0 %	0	1
合計 total	74,2 %	72	1,0 %	1	23,7 %	23	1,0 %	1	97

5. 考察

5-1. 考察

本調査において、店員と客のどちらかの言語運用能力が欠如している際にコード・スイッチングが発生した。これは田崎（2007）や吉野・西住（2015）

が分析したように、モンレアルにおいては意思疎通の問題を解決するために使用されていると考えることができる。また、文間コード・スイッチングは比較的多く見受けられ、特にそれはコミュニケーション・アコモデーション理論におけるコンバージェンスであった。Yoshida (2019) では、コード・スイッチングによって引き起こされたコンバージェンスは社会的距離を縮めると示唆したが、ケベック州においては Bouchard & Taylor (2008) が報告した妥当なる調整の日常的な実践であるとも考察することができる。

しかしながらカフェでの会話は店員にとって仕事である。Bell (1984) が述べた通り、商品を円滑に販売するために店員は客に対してコンバージェンスとなる言語選択を行った可能性は高い。またオーディエンス・デザインや Yoshida (2017, pp. 8-9) の考えに従えば、フランス語母語話者が多い地域の店舗で勤務する店員は英語の使用に対して抵抗感を感じる者もいると考えられる。しかし、フランス語や両連邦公用語以外の言語を母語としている住民や移民の多い地域においてその抵抗は弱く、注文等を待っている客や他の店員、つまり Bell (1984, 2001) に従えば傍聴人、偶然聞く人、盗み聞く人からの英語使用に対する批判を気にせず、英語を選択することができる可能性が高いと考察できる。

言語選択調査において客席とレジとの距離、客同士の話し声の大きさによって観察を行えない地区がいくつかあった。今後、同じような調査を行う際には場所を再検討する必要がある。またデータの信憑性やモンレアル全体の比較をさらに進めるには、より多くのデータが求められる。これらの課題の解決は今後の研究課題としたい。

5-2. 言語景観のデータを用いた言語計画への応用

Jernudd & Gupta (1971, p. 265) は言語計画を行う際に5つのステップがあると述べたが、その1番目は問題と事実の確認であり、国勢調査の統計を使用することを提唱している。しかし、第4章のように、モンレアル全体の国勢調査と各地域の国勢調査はそれぞれ様相が異なる。また国勢調査において両連邦公用語以外を母語としている者が多い4-4. Mile Endのカフェではフランス語が多く使用されており、国勢調査から見える言語の使用状況と異なる事例もあった。また、同章では書き言葉（はり紙調査）と話し言葉（言語選択観察）の調査を行ったが、Snowdonのように書き言葉と話し言葉における言語使用がそれぞれ異なる場合もあった。そもそも、カナダ連邦国勢調査の言語に関する質問には明確な基準があるのではなく、回答者が主観的に連邦公用語で会話

が行えるかを回答する。大石（2013, p. 25）でも述べられているが、回答の中には、会話が円滑に展開できなくとも会話は成立すると回答している事例、反対に会話は行っても不十分だと考えて会話が成立しないと回答する事例も考えられる。大石（2015）は2011年度からカナダ連邦国勢調査の調査方法が変更されたことを受け、標本の偏りなどデータの質が低下している可能性があり、また過去のデータとの比較や分析が不可能になったと報告している。よって国勢調査のみで1番目の言語計画の問題と事実の確認をすることは、2番目のゴールの詳述や、3番目の可能な解決策の作成・コスト計算・合理的な解決策の決定に悪影響を及ぼすと考えられる。

言語景観は実際に研究者や調査者が調査地の言語使用状況を観察するが、それによって国勢調査などの地域区分よりも細かく対象地を分析することができる。言語景観における書き言葉の量的調査は、もともと Landry & Bourhis (1997) がカナダ連邦内に住むフランス語話者のエスノリングイスティック・バイタリティの度合いを測るものとして提唱したが、この調査方法は社会における言語選択の状況を数値化できる。また言語景観の質的調査によって、大石（2008）や丹羽（2014 a）、Lamarre（2014）、Backhaus（2008）が考察しているように、その社会における言語へのイメージを推測することができる。これらを行うことによって、1の問題や事実の確認において、より実際の状況を反映できると考える。また2のゴールの詳述や3の可能な解決策の作成・コスト計算・合理的な解決策の決定を行う際にも、対象地の中でもより具体的にどの地域で、またどのように言語計画の地位計画を行うことが有効かを考察しやすくなるだろう。

しかしながら第4章で見たように、書き言葉と話し言葉では言語選択が異なることが分かった。話し言葉の調査では、その地域の居住者や滞在者、労働者、学生などが実際にどのように口頭で言語を使用しているのかを知ることができる。つまり、現在主流となっている書き言葉の調査のみならず、言語景観の中に話し言葉の調査も含めるべきである。

今回はモンレアル内の様々な地域の言語選択の違いを調査したため、話し言葉の調査において1地域の言語データはおおよそ30件と少なく、より多くのデータ収集が必要である。しかし本現地調査において、とりわけ Parc でフランス語の使用が少なく、またフランス語の使用によって反応が見受けられなかった場合には英語へのコード・スイッチングが頻繁に起こることが分かった。そして英語のみ、つまりフランス語の使用が全く見受けられないはり紙も他地域よりも多く見受けられることがわかった。よって、今回得たデータは2

番目のゴールの詳述の際に貢献でき、モンレアルにおけるフランス語保護を目的とした言語計画を行う際には、Parcにおけるフランス語の使用を促すことが求められるといえる。また図 23 で示したフランス語教師募集のはり紙から、Parcに住む人々はそもそもフランス語の知識が弱いことが考えられる。そのため、3. 可能な解決策の作成・コスト計算・合理的な解決策の決定において、フランス語教育が有効な手段の一つだと考えられる。

5-3. 結論

本稿の研究課題であるモンレアルの実生活においてフランス語の力は強いのか否かについて考察したい。英語話者が多く、また店員同士が英語で話していた地域である Westmount の調査では店員がフランス語を優先的に使用していた。加えて、Gérin-Lajoie (2014) はモンレアルで生まれ、成長している英語話者は、トロントのような英語話者カナダ人ではなく、モンレアル人としてのアイデンティティがあると述べた。つまり、英語話者のフランス語使用率は高く、第一言語としての英語とフランス語という対立が少なくなっていることを示唆できる。

しかし、例として Parc や Snowdon のように移民が多い地域では、フランス語の使用率が少なく、英語の使用が他の地域よりも多めに見受けられた。従って、2019 年においては第二言語としての英語対フランス語という構図になっている可能性がある。つまり、モンレアルにおいて、フランス語話者に対しても、またケベックで生まれた英語話者に対してもフランス語の力は一定程度あると考えられるが、英語とフランス語を母語としない移民にとってそれは適用されない可能性があることを示唆できる。今後はより多くの地域で言語景観の調査をし、言語データを分析することで、移民の中でもどの言語グループがフランス語の使用を避けているのか、またその理由を調査したい。

今回は書き言葉のみならず、話し言葉を含めた言語景観の調査を主軸としたため、ケベック州フランス語局による報告書やケベック州政府による規制に関する調査や研究が弱くあり、十分とは言えない。特に、2022 年には 96 号法というフランス語憲章の修正法がケベック州議会で可決された (矢頭, 2022, p. 42)。この修正法はケベック州フランス語局の権限強化をはじめとし、商業サイン表示も更なるフランス語化が求められている。また同法は学校教育におけるフランス語化の強化も目標としている。フランス語や英語の母語話者ではない人々を指すアロフォンがイマージョン・プログラムを避けるためにケベック州から離れることが予測されることから、小松 (2023) は同教育方式における

アロフォンのフランス語化が今後の課題であると述べた。加えて、本調査はコロナウイルスの感染拡大に伴う行動・渡航制限前に行ったものである。制限が解除された後の2023年5月3日から5月7日にモンREALを訪れたが、以前よりも閉店している店が多く見受けられた。また行動・渡航制限によって、モンREALにおける人の流入や流出は以前と異なっていると考えられ、そもそもの言語データ数が減少し、以前とは異なる結果になる可能性がある。ケベック州政府の政策やケベック州フランス語局の動向を踏まえた上で、更なる書き言葉と話し言葉を合わせた言語景観の調査や、より具体的な言語計画の方法は今後の研究課題としたい。

参考文献

- 東照二 (2009) 『社会言語学入門：生きた言葉のおもしろさに迫る』東京、日本、研究社。
- 荒木 隆人 (2011) 「ケベック言語法を巡る政治闘争」『ケベック研究』3, 43-63. 日本ケベック学会。
- 荒木 隆人 (2017) 「ブシャーレ=テイラー委員会による間文化主義のケベック社会における需要に関する一考察」『ケベック研究』9, 5-19. 日本ケベック学会。
- 伊藤 恵美子 (2004) 「データ収集における方法論の検討：言語教育に寄与する発話データを集めるには？」『ことばの科学』17, 5-22. 名古屋大学言語文化研究会。
- 大石 太郎 (2008) 「カナダ、ノヴァスコシア州農村地域の言語景観」『学芸地理』63, 12-22. 東京学芸大学地理学会。
- 大石 太郎 (2013) 「カナダの大都市圏におけるフランス語話者人口の分析：1971年と2011年との比較」『国際学研究』2(1), 21-31. 関西学院大学国際学研究フォーラム。
- 大石 太郎 (2015) 「カナダの国勢調査における詳細調査票の廃止とその影響」『E-journal GEO』10(1), 18-24. 日本地理学会。
- 大石 太郎 (2017 a) 「カナダにおける二言語主義の現状と課題」『E-journal GEO』12(1), 12-29. 日本地理学会。
- 大石 太郎 (2017 b) 「ケベック州における英語話者の居住分布と言語環境への適応」『ケベック研究』9, 59-74. 日本ケベック学会。
- 大石 太郎 (2019) 「首都オタワワのカナダ・デーの特徴と新たな動向」『カナダ研究年報』39, 77-84. 日本カナダ学会。
- 太田 勇 (1985) 「マレーシア、シンガポールの言語環境と華語社会」『地理学評論』58(5), 318-339. 日本地理学会。
- 大原 祐子・馬場 伸也 (編) (1984) 『概説カナダ史』東京、日本、有斐閣。(本論文では伊藤 勝美の項を参照した。)
- 小川 敦 (2015) 『多言語社会ルクセンブルクの国民意識と言語』大阪、日本、大阪大学出版界。
- 小畑 精和・竹中 豊 (編) (2010) 『ケベックを知るための54章 エリア・スタディーズ』東

- 京, 日本. 明石書店. (本論文では、竹中 豊、丹羽 卓、古地 順一郎、矢頭 典枝の項を参照した。)
- ガニヨン, アラン = G・イアコヴィーノ, ラファエル (著) 丹羽 卓, 古地 順一郎, 柳原 克行 (訳) (2012) 『マルチナショナリズム: ケベックとカナダ・連邦制・シティズンシップ』東京, 日本. 彩流社.
- 川口 裕司, 矢頭 典枝, 秋廣 尚恵, 杉山 香織 (編訳) (2019) 『フランコフォンの世界 コーパスが明かすフランス語の多様性』東京, 日本. 三省堂.
- 栗林 克匡 (2010) 「社会心理学におけるコミュニケーション・アコモデーション理論の応用」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』47, 11-21. 北星学園大学.
- クルマス フロリアン (著) 諏訪 功, 大谷 弘道, 菊池 雅子 (訳) (1993) 『ことばの経済学』東京, 日本. 大修館書店.
- 小林 順子 (1994) 『ケベック州の教育: 1600年から1990年まで』東京, 日本. 東信堂.
- 小松 祐子 (2017) 「ケベックとカナダ他州フランコフォン共同体との関係」『ケベック研究』9, 46-58. 日本ケベック学会.
- 小松 祐子 (2023) 「ケベック州におけるイマージョン教育の現状と課題」『ケベック研究』15, 74-76. 日本ケベック学会.
- 佐々木 菜緒・仲村 愛 (2016) 「現代ケベックのネイション意識変容序論: 「静かな革命」と雑誌の役割」『ケベック研究』8, 64-83. 日本ケベック学会.
- 竹中 豊 (2014) 『ケベックとカナダ 地域研究の愉しみ』東京, 日本. 彩流社.
- 田崎 敦子 (2007) 「接触場面におけるコードスイッチングはコミュニケーション上の問題をどのように解決するのか —理工系大学院生のグループディスカッションを対象に—」『言語文化と日本語教育』33, 47-56. お茶の水女子大学日本語文化学会研究会.
- 田澤 卓哉 (2016) 「1995年以降のケベック政治の展開」『ケベック研究』8, 177-120. 東京, 日本. 日本ケベック学会.
- 田中 善英 (2006) 「スイスにおけるロマンシュ語の現状について」『フランス文化研究』37, 137-146. 獨協大学外国語学部.
- 田中 善英 (2017) 「言語による絶滅危機度の差とその人口統計的要因」『フランス文化研究』48, 61-70. 獨協大学外国語学部.
- 田辺 俊介 (2010) 『ナショナル・アイデンティティの国際比較』東京, 日本. 慶應義塾大学出版.
- 寺尾 智史 (2014) 『欧州周縁の言語マイノリティと東アジア』東京, 日本. 彩流社.
- 寺迫 正廣 (2002) 「フランスの地方語とバイリンガル教育 ~アルザス語の場合~」『言語と文化: 大阪府立大学総合科学部言語センター論文集』1, 119-137. 大阪県立大学.
- 鳥羽 美鈴 (2012) 『多様性のなかのフランス語』兵庫, 日本. 関西学院大学出版会.
- 中井 精一・ロング, ダニエル (編著) 内山 純蔵 (監修) (2011) 『世界の言語景観 日本の言語景観 —景色のなかのことば—』富山, 日本. 桂書房.
- 丹羽 牧代 (2014 a) 「言語景観の多層性に関しての一考察」『アカデミア文学・語学編』95, 179-201. 南山大学.
- 丹羽 牧代 (2014 b) 「都市多言語エリアにおける共同体意識の変容に関する一考察 ~地方自治体による言語併記の取り組みを手掛かりとして~」『人間関係研究』13, 41-69.

南山大学.

- 丹羽 牧代 (2016)「マルタの言語景観から——二言語併用におけるマルタ語の表出をめぐる」『アカデミア 文学・語学編』99, 173-190. 南山大学.
- 丹羽 牧代 (2018)「多言語表記景観研究の質的転換——時空間における情報集積の運ぶメッセージ——」『南山大学短期大学部紀要』39, 61-80. 南山短期大学.
- 長谷川 秀樹 (2002)「『少数言語』としてのフランス語——合衆国ルイジアナを事例として」『フランス語教育』30, 73-85. 日本フランス語教育学会.
- ブシャール, ジェラルド・テイラー, チャールズ (編) 竹中 豊, 飯塚 佐代子, 矢頭 典枝 (訳) (2011)『多文化社会ケベックの挑戦』東京, 日本 三元社.
- 宮原 温子 (2013)「コードスイッチングのアコモデーション理論による一考察」『目白大学 人文学研究』9, 165-177. 目白大学.
- 矢頭 典枝 (2008)『カナダの公用語政策：バイリンガル連邦公務員の言語選択を中心として』東京, 日本. リーベル出版.
- 矢頭 典枝 (2009)「はじめに：1995年の州民投票を振り返って」『ケベック研究』8, 115-116. 日本ケベック学会.
- 矢頭 典枝 (2016)「〈フランス語社会〉の視点から——Perspective sociolinguistique de « la langue française »」『ケベック研究』1, 22-27. 日本ケベック学会.
- 矢頭 典枝 (2017)「ケベック・フランス語の職業名と文体の女性化」『ケベック研究』9, 133-135. 日本ケベック学会.
- 矢頭 典枝 (2022)「フランス語憲章制定から40年以上経たケベック州の言語状況——言語管理機関による「評価」の検証——」『ケベック研究』14, 24-46. 日本ケベック学会.
- 山下 清海 (編著) (2011)『現代のエスニック社会を探る 理論からフィールドへ』東京, 日本. 学文社.
- 山本 雅代 (編著) (2014)『バイリンガリズム入門』東京, 日本. 大修館書店.
- 吉田 悠佑 (2019)「カナダ・ケベック州におけるフランス語保護の過程・動機・条件：フィンランド共和国との比較を通じて」『フランス語フランス文化研究』24, 71-99. 獨協大学大学院外国語学研究科.
- 吉野 文・西住 奏子 (2015)「『二言語併用ゼミ』の場面における参加者の言語使用：座談の分析に関する一試論」『国際教育 = International education』8, 35-50. 千葉大学国際教育センター.

Ager, Dennis. (2001) *Motivation in language planning and language politics*. Clevedon, Royaume-Uni. Multilingual Matters.

Backhaus, Peter. (2008) "Multilingualism in Tokyo: A Look into the Linguistic Landscape" *Linguistic Landscapes: Expanding the Scenery*, 40-54. Londres, Royaume-Uni. Routledge.

Bell, Allan. (1984) "Language style as audience design" *Language in Society*, 13, 145-204. Cambridge University Press.

Bell, Allan. (2001) "Back in style: reworking audience design" *Style and sociolinguistic*

- variation*, 139–169. Cambridge, Royaume-Uni. Cambridge University Press.
- Blommaert, Jan. (2010) *The sociolinguistics of globalization* Cambridge, Royaume-Uni. Cambridge University Press.
- Blommaert, Jan. (2013) *Ethnography, Superdiversity and Linguistic Landscapes: Chronicles of Complexity* Ontario, Canada. Multilingual Matters.
- Bouchard, Gérard. & Taylor, Charles. (2008) *Fonder L'avenir Le temps de la conciliation Rapport Abrégé* Québec, Canada. Gouvernement du Québec.
- Bourhis Y., Richard. & Landry, Rodrigue. (1997) "Linguistic Landscape and Ethnolinguistic Vitality An Empirical Study" *Journal of Language and Social Psychology*, 16(1), 23–49. Sage Publications.
- Bourhis Y., Richard. & Landry, Rodrigue. (2002) "La loi 101 et l'aménagement du paysage linguistique au Québec" *Revue d'aménagement linguistique*, 2(2), 18–20. Office québécois de la langue française.
- Boyer, Henri. (2017) *Introduction à la sociolinguistique* Paris, France. Dunod.
- Calvet, Louis-Jean. (1994) *Les Voix de la Ville : Introduction à la sociolinguistique Urbaine* Lausanne, Suisse. Payot.
- Charland, Maurice. (1987) "Constitutive Rhetoric: The Case of the People Québécois" *The Quarterly Journal of Speech*, 73 (2), 133–150. Speech Communication Association.
- Coulmas, Florian. (2016) *Die Wirtschaft mit der Sprache Eine sprachsoziologische Studie* Nördlingen, Allemagne. Suhrkamp Verlag.
- Daoust-blais, Denise. (1983) "Corpus and Status language planning in Quebec: A Look at Linguistic Education" *Progress in language planning*, 207–234. Berlin, Allemagne. Cobarrubias.
- Detey, Sylvain., Durand, Jacques., Laks, Bernard. & Lyche, Chantal. (2010) *Les variété du français parlé dans l'espace francophone* Paris, France. Editions Ophrys.
- Fairclough, Norman. (2015) *Language and Power* New York, États-Unis. Routledge.
- Ferguson, Charles A. (1959) "Diglossia" *Word*, 15, 325–340. The Circle.
- Fishman, Joshua A. (1965) "Who Speaks What Language to Whom and When" *Linguistique*, 1(2), 67–88. Paris, France. Presses Universitaires de France.
- Fishman, Joshua A. (1967) "Bilingualism With and Without Diglossia; Diglossia With and Without Bilingualism" *Journal of Social Issues*, 23(2), 29–38. Wiley-Blackwell.
- Fishman, Joshua A. (1972) "The Relationship Between Micro- and Macro-Sociolinguistics in the Study of Who Speak What Language to Whom and When" *Sociocultural Change*, 245–267. California, États-Unis. Stanford University Press.
- Fishman, Joshua A. (1997) "Language and ethnicity the view of from within" *The handbook of sociolinguistics*, 327–343. Oxford, Royaume-Uni. Wiley-Blackwell.
- Fraser, Graham. (2006) *Sorry, I don't speak French: confronting the Canadian crisis that won't go away*. Ontario, Canada. Douglas Gibson books.
- Gérin-Lajoie, Diane. (2014) "Identité et sentiment d'appartenance chez les jeunes anglophones de Montréal" *Recherches sociographiques*, 55(3), 467–484. Recherches

- sociographiques & Université Laval.
- Giles, Howard. (1973) "Accent Mobility: A Model and Some Data" *Anthropological Linguistics*, 15(2), 85-105. Trustees of Indiana University.
- Giles, Howard., Coupland, Nikolas. & Coupland, Justin. (1991) "Accommodation theory: Communication, context, and consequence" *Studies in emotion and social interaction. Contexts of accommodation: Developments in applied sociolinguistics*, 1-68. Cambridge, UK. Cambridge University Press.
- Giles, Howard., Taylor, Donald M. & Bourhis, Richard Y. (1973) "Towards a Theory of Interpersonal Accommodation through Language: Some Canadian Data" *Language in Society*, 2(2), 177-192. Cambridge University Press.
- Giles, Howard., Bourhis, Richard Y. & Taylor, Donald M. (1977) "Towards a theory of language in ethnic group relations" *Language, Ethnicity and Intergroup Relations*, 307-348. Londres, Royaume-Uni. Academic Press.
- Giles, Howard. & Ogay, Tania. (2010) "Communication accommodation theory" *Explaining communication: contemporary theories and exemplars*, 293-310. New York, États-Unis. Routledge.
- Greenfield, Lawrence., Fishman, Joshua A. (1970) "Situational Measures of Normative Language Views in Relation to Person, Place and Topic among Puerto Rican Bilinguals" *Anthropos*, 3(4), 602-618. Anthropos Institute.
- Gumperz, John. (1967) "On the Linguistic Markers of Bilingual Communication" *Journal of Social Issues*, 23(2), 48-57. Society for the Psychological Study of Social Issues.
- Gumperz, John. (1977) "The Sociolinguistic Significance of Conversational Code-Switching" *RELC Journal*, 8(2), 1-34. Regional Language Centre.
- Haugen, Einar. (1983) "The Implementation of corpus planning: theory and practice" *Progress in language planning*, 269-289. Berlin, Allemagne. Cobarrubias.
- Heller, Monica. (1978) "'Bonjour, Hello?'" Negotiations of Language Choice in Montreal." *Proceedings of the 4th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 588-597.
- Heller, Monica. (2011) "Du français comme "droit" au français comme "valeur ajoutée" : de la politique à l'économique au Canada" *Langage et Société*, 126, 13-30. Paris, France. Éditions de la Maison des sciences de l'homme.
- Holmes, Janet. & Wilson, Nick. (2017) *An introduction to sociolinguistics*. New York, États-Unis. Routledge.
- Hymes, Dell. (1996) *Ethnography, linguistics, narrative inequality* New York, États-Unis. Routledge.
- Jernudd, Björn H. & Gupta, Jyotirindra Das. (1971) "Towards a theory of language planning" *Can Language be Planned?: Sociolinguistic Theory and Practice for Developing Nations*, 195-215. Hawaii, États-Unis. University Press of Hawaii.
- Labov, William. (2006) *The Social Stratification of English in New York City* New York, États-Unis. Cambridge University Press.

- Labov, William. (2013) *The Language of Life and Death The Transformation of Experience in Oral Narrative* New York, États-Unis. Cambridge University Press.
- Lamarre, Patricia. (2014) "Bilingual winks and bilingual wordplay in Montreal's linguistic landscape" *International Journal of the Sociology of Language*, 228, 131–151. De Gruyter.
- Lambert, Wallence. E., Hodgson, R. C., Gardner, Robert. C., & Fillenbaum, S. (1960) "Evaluational Reactions to Spoken Languages" *Journal of Abnormal and Social psychology*, 60(1), 44–51. APA publishing.
- Landry, Rodrigue & Bourhis, Richard. (1997) "Linguistic Landscape and Ethnolinguistic Vitality An Empirical Study" *Journal of Language and Social Psychology*, 16(1), 23–49. SAGE Publications.
- Macnamara, John. (1967 a) "The Bilingual's Linguistic Performance – A Psychological Overview" *Journal of Social Issues*, 23(2), 58–77. Wiley-Blackwell.
- Macnamara, John. (1967 b) "The Effects of Instruction in a Weaker Language" *Journal of Social Issues*, 23(2), 121–135. Wiley-Blackwell.
- Oakes, Leigh. & Warren, Jane. (2007) *Language, Citizenship and Identity in Quebec* Londres, Royaume-Uni. Palgrave Macmillan.
- Office québécois de la langue française. (2000) *La langue de l'affichage à Montréal de 1997 à 1999* Québec, Canada. Office québécois de la langue française.
- Office québécois de la langue française. (2012) *La langue de l'affichage commercial sur l'île de Montréal en 2010* Québec, Canada. Office québécois de la langue française.
- Office québécois de la langue française. (2016) *Affichage des marques de commerce* Québec, Canada. Office québécois de la langue française.
- Office québécois de la langue française. (2018) *Langue de l'affichage public des entreprises de l'île de Montréal : de février à mai 2017* Québec, Canada. Office québécois de la langue française.
- Ota, Isamu. (1985) "Recent Changes in the Chinese-Speaking Environment of Singapore" *Geographical Review of Japan*, 58(2), 115–129. 日本地理学会.
- Poplack, Shana. (1978) "Dialect acquisition among Puerto Rican bilinguals" *Language and Society*, 7(1), 89–103. Cambridge, Royaume-Uni. Cambridge University Press.
- Poplack, Shana. (1980) "Sometimes I'll start a sentence in Spanish Y TERMINO EN ESPAÑOL: toward a typology of code-switching" *Linguistics*, 18(7–8), 581–618. De Gruyter.
- Mesthrie, Rajend., Swann, Joan., Deumert Ana. & William L. Leap. (2004) *Introducing Sociolinguistics* Philadelphia, États-Unis. John Benjamins Publishing.
- Razafimandimbimananana, Elatiana. (2005) *Français, Français, Québécois-quoi?* Paris, France. L'Harmattan.
- Reh, Mechthild. (2004) "Multilingual writing: A reader-oriented topology with examples from Lira Municipality" *International Journal of the Sociology of Language*, 170, 1–41. De Gruyter.

- Sankoff, David. & Poplack, Shana. (1981) "A Formal Grammar for Code-Switching" *Paper in Linguistics*, 14(1), 3-46. Linguistic Research inc.
- Spolsky, Bernard. (2010) *Sociolinguistics* Bristol, Royaume-Uni. Oxford University Press.
- Thériault, Joseph Yvon. (2007) "Langue et Politique au Québec : Entre mémoire et distanciation" *Hérodote*, 126, 115-127. La Découverte.
- Tussupbekova, Madina Zh. & Enders, Peter. (2016) "Linguistic landscape in Kazakhstan : public signs in Astana" *International Education & Research Journal*, 2(2), 18-20. International Education & Research Journal.
- Walsh, Olivia. (2016) *Linguistic Purism Language Attitudes in France and Quebec* Philadelphia, États-Unis. John Benjamins Publishing.
- Weber, Jean-Jacque. & Horner, Kristine. (2012) *Introducing multilingualism: a social approach* Londres, Royaume-Uni. Routledge.
- Wendel, John N. (2018) "Linguistic Landscapes and Superdiversity in Istanbul - A Focus on Kulkapi, "Istanbul's Mogadishu"" The International Academic Forum.
- Yoshida, Yusuke. (2017) *Sprachauswahl im Diskurs : Code-Wechsel und der Bereich Soziale Entfernungen* 2017 年度獨協大学外国語学部ドイツ語学科卒業論文.

謝辞

本論文は2019年度の修士論文『言語選択と言語景観、言語計画の関係性について：批判的社会言語学によるケベック州モンレアルの状況分析に基づく考察（À propos de la corrélation entre le choix de la langue, le paysage linguistique et l'aménagement linguistique : réflexion à l'aide de la sociolinguistique critique basée sur l'analyse d'une situation linguistique à Montréal, Québec）』を加筆修正したものである。指導教員である田中善英先生、金井満先生、Angelika Werner先生、また授業等を通じて助言を頂戴した廣田愛理先生、John Wendel先生、水林 Michèle先生、山田恒久先生、辻田麻里先生にお礼を申し上げる。

本研究のうち、モンリアルで行った現地調査は「2019年度日本ケベック学会・国際ケベック学会共催小畑ケベック研究奨励賞」(Le prix Obata de l'AJEQ-AIEQ pour la recherche sur le Québec) の助成金を受けて実施した。お力添えをいただいた全ての方々、特に受け入れをしていただき、且つご助言をくださった Steeve Mercier 氏、神崎佐智代氏、Christine Prévile 氏、橘木芳徳氏に謝辞を述べたい。